

ハードボイルド探偵 天羽 奏

ナイトメア・ゼロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんとなく思いついたので書いてみました。シンフォギア555 終了後続きを書く予定ですが人気次第では同時進行をしようと考えています。

目 次

プロローグ	1
Sの探偵	5
Nの恋人	12
NはTに溺れる	22
C調査	38
Pの恐怖	42
Bでの会合	47
Mのストーカー?	53
Mのストーカー事件解決	57
Kの悲しみ	64
Sの過去	70
N 悪夢の夜	76
Hの痛恨	85
Dの女	95
B 始まりの夜	101
A 入学／E 出会い	111
M メモリ／A 覚醒	120
S 特異災害機動部二課／D 探偵事務所	
J 宝石泥棒／Q 認められない喧嘩	

プロローグ Sの探偵

これはあたしがまだ子供の頃だつた話。あたしは両親と妹と一緒に遺跡にある聖遺物を発掘しにいった。特になんの異変も起きず順調に作業が行われていた時だつた。突然そこにノイズが現れた。そしてあいつらのせいであたしは家族を失つた。

発掘チームはノイズに殺された。言い方が悪いかも知れないけど、あたしの両親は発掘チームを囮にして一緒に逃げた。だけどノイズに回り込まれ逃げ場を失った。

両親は、あたしと妹を逃がそうと身体を張つて逃げ道を作つてくれた。そのおかげで遺跡の入口まであたしと妹は逃げれた。あたしは振り返つて妹の顔を見て笑つた。そして力強く手を握り引っ張つて遺跡から出ようとした瞬間だつた。突然軽くなつたんだ。あたしは嫌な予感をして振り返るとそこには燃えカスのような炭になつた妹がいた。妹は「助けて。お姉ちゃん」と言つてあたしの目の前で身體が崩れ落ちた。

ノイズはゆっくりとあたしに歩み寄ってきた。

その証拠にあたしの前に妹はない。あるのは妹だったものとノイズだけだつた。

ノイズはゆつくりとあたしに歩み寄つてきた。

何の力もなかつた子供のあたしは死への恐怖に耐えながら、この命が消えるまで目の前のノイズを睨み続けることしかできなかつた

その時だつた。

男の声が聞こえた。あたしは振り返るとそこには白いスーツと
白い帽子を被つた男が現れた。男は腰に何かを付けると胸ポケット
から何かを取り出した。

そしてそれを腰につけたものにセットした。

すると男は姿を変えた。そこにはドクロの仮面をしておりそして白い帽子を被つた男がいた。

「さあ・・・・・お前達の罪を・・・・・数えろ」

『SKUUL MAXIMUM DRIVE』

男は走り出してあたしを通り過ぎるとノイズの顔を蹴り飛ばした。蹴り飛ばされたノイズは後ろにいた他のノイズを巻き込んだ後巻き込まれたノイズは炭になつて崩れ落ちた。

男は元の姿に戻るとそう言つてあたしに手を差し伸べた。

「ツ！」

パン!!

だけどあたしはその手を払つた。あたしは立ち上がりつて男のスースを掴んだ。

「なんでだよ。・・・・なんでもつと早く助けに来なかつたんだよ！お前がもつと早く来てたら父さんも母さんも・・・・鏡花も死なずに済んだのに！！・・・・なんでだよ!!!」

あたしは命の恩人である男に向かつてそう言つた。そしてあたしは何度も男の胸を叩いた。あたしは泣きながら男に八つ当たりをした。だけど男は何もせずあたしのやりたいようにさせていた。そして男はあたしを抱きしめると

「すまなかつた。お嬢ちゃんの大好きな両親を・・・・妹を救えなくて。・・・・オラがもつと早く来ていればこんな辛い目に合わせずに済んだのに・・・・すまなかつた」

男はそう言うとあたしは大泣きした。多分人生で一番泣いたと思う。あたしが泣き終えると男はこう言つたんだ。

「行く場所があるのか？」

つて聞いてきた。正直この時のがたしはこの先どうすればいいのか分からなかつた。だけど男はこう言つたんだ。

「お嬢ちゃんが良ければオラの家に来るか？まあ、家つて言つてもオラの仕事場だけど・・・・引き取り先が見つかるまでいるか？」

男はあたしにそう言うとあたしはコクリと頷いた。男はあたしを背負うとその遺跡から出た。

「なあ

「ん？」

「あんた名前なんなんだ？」

あたしは男にそう聞いた。

「オラか？オラは野原 信之介（のはら しんのすけ）35歳。探偵だぞ」

これが名探偵、野原 信之介とあたし天羽 奏の出会いだつ

た
。

Nの恋人

あの事件から半年が経つた。あたしはおいしそうな香りにつけられて目を覚ましベッドから起き上がりとそこには白いスースを着た信之介さんが朝食をテーブルに並べていた。

「おはよう奏ちゃん。よく眠れたか？」

信之介さんはそう言つて信之介さん専用のコップにブラックコーヒーを入れて飲み始めた。

「おはようございます。信之介さん」

あたしはそう言つてイスに座つてトーストと目玉焼きとウインナーを食べた。信之介さんは私立探偵を仕事にしているけどあたしが知つている探偵の仕事とは全然違っていた。信之介さんがやつている仕事は基本的にペツト探しや浮氣調査、人探しの仕事ばかりだつた。中には常連さんがいるけどアニメでやつてているような事件を推理して犯人を捕まえるような仕事はなかつた。

「・・・・信之介さん」

「ん? どうした奏ちゃん」

「・・・・あたしはいつになつたらノイズを殺せる力をくれるんですか？」

あたしがこの事務所にいるのはあの時、信之介さんがノイズを全滅させた力を手に入れるためにここに残つてゐる。たまに信之介さんの帰りが遅い時は事務所の中にあるあの力を探してゐるが結局見つからずよく信之介さんに怒られた。

信之介さんは力を渡すのにふさわしくなつた時に力を渡すつて言つてたけど未だにあたしに力をくれなかつた。

「・・・・前にも言つたけど奏ちゃんにガイアメモリは、早すぎる。それにその力を手に入れても考えているのはノイズに復讐することだろ？」

「当たり前だ!! 信之介さんだつて見たはずですよ!! あたしの前で父さんと母さん、鏡花が殺された瞬間を・・・・家族の仇を取れるならあたしは地獄にだつて落ちる覚悟がある! 悪魔にだつて魂を渡す覚悟

がある!!だから信之介さん!!そのガイアメモリをあたしにくれ!あたしだつて一人前になつたはずだ!!

あたしだつてそれとなく信之介さんの仕事を手伝つていたつもりだ。まだ一人前じゃなくてもガイアメモリさえあれば1人でも戦える自身があつた。だけど。

「それでもダメだぞ。奏ちゃんはまだ半人前だ。それに復讐をしても家族は帰つてこないぞ」

信之介さんはあたしにそう言うとあたしはテーブルを思いつきり叩くと立ち上がつた。

「もういいです!!」

あたしはそう言つて事務所を飛び出した。そんなにあたしは頼りないんですか?信之介さん。復讐がそんなにダメなんですか?あたしは走つてその場を後にした。

あたしは町をうろうろしてから事務所に戻ると話し声が聞こえた。信之介さんに依頼が来たと思つたあたしはこつそりと話を聞いた。

「本当に久しぶりだねしんちゃん!噂には聞いてたけど本当に探偵をしていたなんてネネは知らなかつたわ」

「ひどいぞネネちゃん。オラの活躍を知らないなんて」

信之介さんが楽しそうに会話をしている。この時あたしは信之介さんの友達かなつて思つた。すると。

「奏ちゃん。帰つて来て早々に悪いけどコーヒーを入れてくれないかな？」

どうやら信之介さんはあたしが帰つて来たことを知っていたようだつた。あたしが事務所に入るとそこにはスタイルのいい赤髪の女性がいた。

「え？ しんちゃんつてもしかして結婚してたの!?」

ネネつていう女の人はそう言つて信之介さんを見た。

「違うぞ。奏ちゃんはノイズ騒ぎの生き残りで彼女を救出した後そのまま引き取つたんだ」

あたしは入れたコーヒーを信之介さんとネネさんに渡した。
「せつかくだからネネちゃんに紹介するぞ。彼女は天羽 奏つてい
うんだぞ」

「・・・はじめまして。天羽 奏です」

あたしはそう言うと。

「ふふ。私は桜田 ネネです。WINDSCALEって言う会社でデザイナーやつているの」

ネネさんがそう言うと信之介さんコーヒーを吹き出した。

「信之介さん!？」

「ちよつ!? ちよつと汚いでしょ!!」

「ゞ、ごめん。それよりネネちゃんあのWINDSCALEな就職してたの!?」

信之介さんそう言つてコーヒーを机に置いた。

「信之介さん。WINDSCALEつてなんですか？」

「WINDSCALEというのは日本の超有名なファッショングループ企業。あの企業がデザインした服はオラも好きなんだ。ネネちゃんがそんな大企業に就職していたなんて意外だぞ」

信之介さんはそう言つてコーヒーを飲んだ。

「ふふん。これでもいくつかアイデアを採用してくれてそれなりの役職についたのよ」

「大出世じゃないか!? 子供の時は、アイドルとか女優になるつて言つていたのが嘘に感じるぞ」

「ちよつ！それ黒歴史だからやめてよしんちゃん！」

そうやつて信之介さんは昔話に華を咲かせていると本題に入つた。

「実はしんちゃんにお願いがあるの」

「どんな依頼だ？」

「私の彼氏を探して欲しいの!!」

ネネさんはどうやら同じ職場の人と付き合っていたらしいけどある日突然姿を消したらしい。名前は熔岩 修造（ようがんしゅうぞう）37歳。暑苦しいところもあるが眞面目で仕事熱心な努力家で職場の人間関係も良好な男性。ある日突然会社を休むようになつてそれ以来行方が分からなくなつてしまつたらしい。

「信之介さん。どうします？」

私は信之介さんにそう聞くと。

「分かつた。幼馴染の頼みだ。格安で引き受けよう」

信之介さんはそう言つて白い帽子を被つた。

「あ、ありがとうございます」

ネネさんはそう言つて頭を下げて泣き始めた。

（その彼氏がよつぽど心配なんだな）

あたしはそう思うと信之介さんはネネさんにハンカチを渡した。「ほらネネちゃん。これで涙をふいて。女性の顔に涙は似合わない。可愛い顔が台無しになつちゃうからな」

あたしは信之介さんのさりげない口説きがすぐ思う。ネネさんも少し顔を赤くしてゐるし。

「奏ちゃん。行くぞ」

「あ、はい」

あたしは信之介さんの手伝いをするためについて行つた。

ネネさんの依頼から3日が経つた。調査した結果、熔岩 修造はWINDSCAPEをクビになっていた。クビになつた理由は最近熔岩 修造は結果を出せずにいたため戦力外として解雇したようだ。信之介さんはクビになつた熔岩 修造を探しているとある服屋の前に熔岩 修造がいた。

「信之介さん！あの人！」

「間違いない。熔岩 修造だ」

信之介さんは熔岩 修造に近づき肩を叩いた。

「・・・・・」

相手は無言であたし達を見た。

「熔岩 修造さんですね。オラは野原 信之介と言います。あなたの恋人の桜田 ネネさんにあなたの搜索を依頼されて・・・!?奏！」

「えつ？」

信之介さんが突然あたしを抱きしめて熔岩 修造から離れた。

「な、なんですか信之介さん！」

あたしは信之介さんにそう言うと。

『MAGMA』

という音声が聞こえた。あたしはそつちを見るとそこには赤いガイアメモリを持った熔岩 修造がいた。

「お前もこの会社の社員か？なら燃えろ！！」

熔岩 修造がそう言うと腕にメモリーを刺した。すると温度が一気に上がり炎が舞い上がつた。そこにはマグマのような化け物がいた。

「なっ！」

あたしはノイズ以外の化け物を初めて見た。そしてそれを見た

周りの人は悲鳴をあげて逃げ始めた。

「な、なんだよあれ？」

あたしは腰が抜けて尻餅をついた。

「…………ドーパントか」

「えつ？」

「奏。危ないから下がつてろ」

信之介さんはそう言つて腰にあの時のベルトをつけるとガイアメモリーを取り出した。

『SKULL』

信之介さんは勢いよくベルトにセットした。

「…………変身」

『SKULL』

するかそこにはあの時のドクロに信之介さんは変身した。

「…………俺は仮面ライダースカル。行くぞ焰岩 修造！」

信之介さんは突然一人称が俺に変わつた。そして化け物に向かつて走り出すと 信之介さんは化け物に殴りかかつた。右左交互にパンチを入れ口一キックもした。化け物は後ろに下がると火炎弾を放つた。信之介さんはそれを転がりながら回避して足払いをして化け物をこかした。

信之介さんは無理矢理立たせると化け物の顔面を思いつきり殴り壁に叩きつけた。

「ギヤア！」

化け物は悲鳴をあげると 信之介さんは銃のようなものを向けながら言つた。

「さあ。ガイアメモリ解除するんだ。そしてネネちゃんのためにも法の裁きを受け真っ当な人間に戻るんだ!!」

信之介さんがそう言つたその時だつた。突然地震が起きた。

「な、なんだ!?」

あたしはそう言うと地面から新しい化け物が出てきた。

「なつ!?別のドーパントか!？」

信之介さんがそう言うとその化け物はマグマの化け物を加え地面の中に消えた。 信之介さんは穴の中を見るがそこには何もないなかつた。

「…………逃げたか」

信之介さんはそう言うとメモリーを抜き元の姿に戻った。

「…………信之介さん」

「…………あががガイアメモリの力だ。奏ちゃんじやあまだあれを使うことはできない。仮に使えたとしても熔岩　修造みたいになる。これが奏ちゃんにガイアメモリを渡せない理由だ」

信之介さんはそう言つて歩いて行つた。あたしはただ見ていふことしかできなかつた。

NはTに溺れる

熔岩 修造が謎のドーパントに連れ去られた次の日。ニュースでは熔岩 修造が死体で発見されたと報道されていた。凶器は鋭い刃物で滅多刺しにされたような痕跡があり警察は恨みによる殺人事件として捜査を開始していた。

信之介さんはネネさんと待ち合わせている喫茶店に行き今回のことを見た。それを報告しに行っている間あたしはこの事務所で留守番をしていた。そしてあたしは昨日見たドーパントと呼ばれる化け物とガイアメモリのことを考えていた。

(ガイアメモリは確実にノイズなどを殺せる力を持っている……けどあんな化け物になるなんてあたし聞いてない。家族の仇の為にあたしは化け物にならなきやいけないのか?)

あたしは復讐のためなら地獄にも落ちる覚悟はあつた。だけどあれは予想外すぎる。あんな化け物になるなんて思わなかつたあたしはどうすればいいのか悩んでいた。すると、「ただいま」

信之介さんが帰ってきた。

「おかえりなさい信之介さん」

信之介さんはコーヒーを淹れるといつもと違いコーヒーに砂糖とミルクを入れて飲み始めた。あたしはいつもと違う信之介さんの行動に首を傾げた。

「どうしたんですか? 信之介さん」

「…………少し気になることがあつたんだ」

信之介さんはそう言つて今回のことがあたしに話した。信之介さんがネネさんに報告をしに行つた時、信之介さんは恨み言を言われるのを覚悟していた。だがこの時ネネさんの反応がおかしかつた。

熔岩 修造を見つけたが何者かに連れ去られことを話した後に朝のニュースで死亡されたことが報道されたことをネネさんに話した。当然ネネさんはそれを知つており熔岩 修造の死を悲しんで泣いていたらしい。

「？ 信之介さん、それは普通の反応じゃないんですか？」

「なんでそう思うんだ？」

「だつてネネさんはあの人人が大切な人だつたんでしょう？ ニュースで報道されて信之介さんの報告を聞いたら悲しむのは普通じやあ「そこがおかしいんだ」？」

「あたしは首を傾げた。信之介さんの言つてることが理解できなかつた。大切な人がこの世からいなくなつた。それを経験したあたしはネネさんの気持ちはすごく分かる。それのどこがおかしいんだ？」

「あたしは混乱していると信之介さんは、パソコンを開いて何かを調べ始めた。あたしは腹がへつたからカップ麺を作つて食べた。信之介さんの分も作つて信之介さんの近くに置くと信之介さんは集中しているのかカップ麺に手をつけず調べていた。

「それから3時間が経つた。あたしはP S 4でゲームをしていると信之介さんがカップ麺を食べながらパソコンとにらめっこしていった。信之介さんはスープを吸いのびきつたラーメンを食べ終えると白い帽子を被つた。

「どこが行くんですか？」

「ああ。ちょっと出かけてくる。帰りは明日になるかもしけないから戸締り頼むぞ」

「信之介さんはそう言つて出かけた。あたしは事務所を掃除して夜ご飯は信之介さんが作つてくれたチャーハンを食べて風呂に入つてパジャマに着替え眠つた。

次の日の朝。信之介さんがソファで寝ていた。疲れているのか少しイビキをかいており白いスーツのままだつた。そして1時間後、信之介さんは目を覚まして起き上がつた。

「おはようございます。 信之介さん」

「おはよう奏ちゃん」

信之介さんは首の骨を鳴らすとコーヒーを淹れ飲み始めた。その時、信之介さんはすごく悲しそうな顔をしていた。

「どうしたんですか？」

あたしは信之介さんにきいてみた。

「…………熔岩 修造を殺した犯人が分かつた」

それを聞いた時あたしは驚いた。信之介さんは、たつた1日で犯人を特定したんだ。

「それ本当なんですか信之介さん!?すごいじゃないですか!!」

あたしは信之介さんにそう言うと。

「すぐない!!」

突然、信之介さんが怒つた。あたしはなんで怒られたのか分からなかつた。

「奏ちゃん。今日は事務所で待つてくれ。オラは犯人を捕まえてくる」

信之介さんはそう言つて事務所を出た。あたしはこつそりと信之介さんの後を追つた。

オラは認めたくなかった。調査通りなら熔岩 修造を殺した犯人はあの人で間違いない。だけどオラは信じたくなかった。あるホームレスからの情報によると1月前に熔岩 修造は何者からガイアメモリを購入しておりそして犯人も1週間前にガイアメモリを購入していた。顔は分からなかつたがネクタイに血のようなシミが付いた男というのは分かつた。元凶はその男なのだろう。そして1週間前に購入したガイアメモリの犯人は…………。「こんなところに呼び出してどうしたのしんちゃん? 私、修造さんが居なくなつてすつごく辛いの」

ネネちゃんはそう言つて口を押さえた。

「…………ネネちゃん。熔岩 修造を殺した犯人を見つけたんだぞ」

オラはそう言つとネネちゃんは驚いた顔をしていた。

「犯人は…………ネネちゃん…………いや。桜田 ネネ、あなたでしょ?」

オラはそう言つとネネちゃんは更に驚いた顔をした。

「な、何を言つてるのよ! そんなわけないでしょ! なんで私が恋人の修造さんを殺すのよ!？」

ネネちゃんはそう言つてオラにキレた。

「オラも信じたくなかったけどちゃんとした証拠があるんだ。ネネちゃんが犯人だつて言う証拠が」

「ちよつと!! いい加減なこと言わないでよ!! 名誉毀損で訴えるわよ!？」

ネネちゃんはそう言つけどオラは無視して続けた。

「まずネネちゃん。ネネちゃんはWINDSCALEを辞めていた」

それを聞いたネネちゃんは動搖した。

「ネネちゃん。熔岩 修造は、確かに評判のいい会社員だつた。だけど裏ではパワハラや恐喝をしていて人の手柄やアイディアをぬんでいるクズだつた。ネネちゃんはその被害者の1人だつた。WINDSCALEの上層部は、熔岩 修造の実力を評価していく期待されていたがある会社員の報告により熔岩 修造がしてきたことが上層部に知れ渡り懲戒免職という処罰を与えた。クビになつた熔

岩 修造はその逆恨みでガイアメモリの力でWINDSCALEの会社員を殺していた。現にはWINDSCALEだけでなくその

家族も警察に殺された会社員の捜査届けを出させていた

「…………」

「ネネちゃんは1週間前に奇妙な男からなんらかの取引をしていたこともオラは知ってる。そしてガイアメモリの所持者派必ずと言つていいほどどこかに隠し持つている。たぶんだけどネネちゃんはそのバツクの中に隠してるんでしょ？」

オラはそう言うとネネちゃんはバツクを隠すようにバツクを後ろに回した。

「なんでだ!?なんでこんなことをしたんだ!!ネネちゃん!!」

「…………仕方ないでしょ?だってアイツが全部悪いんだもん!!私はアイドルや女優の才能が無いって言われて傷ついてなんのやる氣もでなくて1年間ニート生活をしていた。そんな私を救ってくれたのはWINDSCALEだつた!私が趣味で描いていた服のデザインを褒めてくれて社長自らが私をスカウトしてくれたの!!だからその時私は決めたの!いつかアイドルや女優を目指す人たちの希望になるような服をデザインするっていう目標が私にできた!!それをあの男は…………私がデザインした服を全部奪ったのよ!!文句を言つても流されて社長達に言つてもそんなことありえないって言われたのよ!!それだけならまだしもあるの男は私に横領の濡れ衣を着せて私をあの会社から追い出したのよ!!会社を辞めた私はいつかあの男に復讐してやるつて思つて今を生きていたの!!」

ネネちゃんは泣きながらオラにそう言うとバツクからガイアメモリを取り出してオラに見せた。

「この力で私はあの男を殺すことができた!!それだけであの男の被害者になつた人がどれだけ救われたと思つてるの!?なんで私が悪者扱いにするのよしんちゃん!!」

ネネちゃんはそう言つてオラに抱きついた。

「お願いしんちゃん。見逃して。私はあの男が本当に許せなかつた」

ネネちゃんは泣きながらオラにそう言うとオラは

そつと押してオラから離れさせた。

「ネネちゃん。あれを見て」

オラはそう言つて後ろを指すとそこには3台のパトカーが来ていた。

「へつ？しんちゃん？」

「警察にはオラが報告していたんだぞ。そして今の会話もすでに録音済みだぞ。さあ、ネネちゃん。法の裁きを受けてちゃんと罪を償うんだ。オラやマサオくんボーチャンそして風間くんもネネちゃんが帰つてくることをずっと待つてゐるから」

オラはそう言つてネネちゃんを警察に引き渡した。警察もネネちゃんの両脇を掴んで連行しようとしたその時だつた。

「ふん!!」

「ブベツ!!」

「グオアツ!!」

ネネちゃんは右の警察官の股間を蹴り上げ左の警察官に頭突きをした。

「貴様!!何をする!!」

1人の警察官が拳銃をネネちゃんに向けた。

「ネネちゃん!!」

「ネネちゃんはオラに顔を見せた。その顔はまるで麻薬をしている人間のような顔をしていた。

「な、なんだ。しんちゃんは女にめちゃくちゃ甘い探偵だつて聞いてたけどそんなことなかつたんだ」

「やめろ!! やめるんだネネちゃん!!」
ネネちゃんはそう言つてガイアメモリにキスをした。

『T—REX』

「ネネちゃんは肩にメモリを挿すとそこにはティラノサウルスの頭部に手足と尾がついたドーパントに変身した。

「ネネちゃん!!」

「ギヤアオオオオオオオオオオオオ!!!!」

ティーレックスドーパントはオラに威嚇した。

「う、うわあああ!!!」

「ば、化け物!!」

「う、撃て撃て!!!!」

警察官達は銃で応戦するが効いていなかつた。

「応戦するな!! 逃げろ!!」

オラは警察官達にそう言うが聞こえておらずネネちゃんに食われたオラは突進しできたネネちゃんを避けてロストドライバーを装着した。

「あはははは!! 好きよしんちゃん。だから私が食べてあげる!!」

「ネネちゃん・・・・・・」

『SKULL』

オラはロストドライバーにセットした。

「・・・・・・変身」

『SKULL』

俺は落とした帽子を被るとネネちゃんの方を見た。

「・・・・・・俺の罪はネネを助けれなかつた。・・・・・・大切な幼馴染を泣かしてしまつた。・・・・・・そして俺の中での鉄のルールを俺自身が破つてしまつた。・・・・・・これがネネに対しての俺の罪だ。・・・・・さあ、ネネ。・・・・・・お前の罪を・・・・・数えろ」

「ど、どうなつてんだよ」

あたしはこつそりと信之介さんの後をつけてきた。そしたら熔岩　修造殺しの犯人はネネさんだつた。ネネさんは化け物に変身して信之介さん達に襲いかかつたけど・・・・これつてあたしもやばくねえか？

信之介さんは変身して銃で応戦してるけど正直効いてないと思う。ここは即座に逃げたほうがいいかも。

あたしはこつそりと逃げようとした時だつた。あたしの前に化け物が吹っ飛んできた。

そしてそれと同時に信之介さんが銃を連射してあたしの前に着地したんだ。

「奏!!」

「し、信之介さん」

「俺が甘かつた。ちゃんと帰れって言つとくべきだつた。とにかく奏！ここに隠れてろ！！」

信之介さんはそう言つてあたしをパトカーの中に押し込んだ。
「ギヤアオオオオオオオオオオオオ!!!!」

化け物は信之介さんに突進してきたけど顎を蹴り上げてカウンターをした。化け物が倒れるとすぐに立ち上がり威嚇するように鳴くと道路や近くにある手すりそしてパトカーを吸収してティラノサ

ウルスになつた。そしてあたしはと。いうと。

「…………し、しんのすけさーん!!!た、たすけてくれー!!!」

捕まりました。

「奏!!くそ!!メモリの暴走か!?」

ティラノサウルスは信之介さんに噛み付こうとするけど信之介さんはそれを避けて回し蹴りや銃を使って応戦した。信之介さんはティラノサウルスの顔を蹴り怯ませると大きくジャンプをして背中にあるパトカーに飛び移り扉をこじ開けてあたしを出してくれた。

「大丈夫か!?

「あ、ああ！」

信之介さんはメモリを取り出すとそれを銃にセットした。

『SKULL MAXIMUM DRIVE』

信之介さんは、銃口をゆっくりと向けると。

「・・・・スカルパニッシャー」

信之介さんはティラノサウルスに向けて撃つた。信之介さんが撃つた光弾は全てティラノサウルスに命中すると悲鳴をあげて爆発した。そしてあたしの前にガイアメモリが落ちてくるとそのガイアメモリは粉々に碎け散つた。

「や、やつたー！やりましたよ信之介さん!!」

あたしがそう言うと背筋が凍つた。信之介さんはドクロの仮面で隠れて分からぬが信之介さんは確実に怒つっていた。

「あ、ああ」

声が聞こえてあたしはそつちを見るとそこには下半身がなくなり見えてはならないものが見えているネネさんがいた。

「ヒツ!!」

あたしは思わず声をあげた。

「し、しんちゃん。た、たすけて」

「し、信之介さん!!い、急いで救急車を!!」

あたしがそう言うとあたしの目を両手でおつた。

「な、なにするんですか!?信之介さん!!」

「・・・・・帰るぞ。奏」

「な、なにを言つて「ネネならもう死んだ」えつ？」

「・・・俺が殺したんだ」

この時あたしは気づいた。信之介さんが震えていたことに。そしてなんであたしにガイアメモリわ渡さないのかちゃんと理解した。

そして次の日。ネネさんの死がニュースに報道されていた。しかしガイアメモリについてはなにも報道されていなかつた。し

C 調査

あたしは、信之介さんと家で対戦ゲームをしていた。あたしはネネさんの事件以来信之介さんにガイアメモリをねだるようなことをしなくなつた。だけどあたしは信之介さんからガイアメモリについて詳しく聞いてないそもそもそもそもガイアメモリは一体なんなのか知らない。だからあたしは思い切つて信之介さんにガイアメモリってなんのか聞こうと思つた。

「信之介さん」

「どうした奏ちゃん」

「ネネさんの事件の時から聞きたかつただけどガイアメモリってなんなんだ？あれはノイズを殺すことができる力じゃないのか？」

あたしがそう聞くと信之介さんが少し悩むとゲームを中断してあたしの方に向いて信之介さんのスカルメモリをあたしの前に出した。「ガイアメモリは、その名の通りだ。「G a i a」は、地球「M e m o r y」は、記録という意味をもつていて。オラも詳しくは分からぬけど聞けば地球上に記憶された現象・事象を再現するプログラムがこの中に封じ込められているんだ。これを「生体コネクタ」っていうメモリの挿入口を模した黒い模様に挿すとメモリに内包された「地球の記憶」を注入することで、生物をドーパント・・・・奏ちゃんが見た化け物に姿を変えてしまうんだ」

「でも信之介さんもガイアメモリを使つてるけどあんな化け物に変身してないじゃないですか」

「オラは、ロストドライバーっていうベルトで変身してるんだ。だからオラはドーパントとはまた違った存在、仮面ライダーに変身するんだ」

「仮面ライダー？」

「そう。仮面ライダーだ。まあ、オラが勝手に名付けてるだけだけど」「じゃあ、あたしもそのロストドライバーを使えば「ガイアメモリを舐めるなよ？」えつ？」

「オラはロストドライバーのおかげでなんとかなつていいだけだ。い

くらベルトをつけても普通の人間がガイアメモリを使った場合、その力の強さに負けて地球の記憶に飲み込まれたり毒素に精神と肉体を蝕まれたりして、暴走したり依存症になつたりするケースもあるんだぞ」

「!!なんですかそれ?!じゃあ、ガイアメモリって麻薬なんですか!?」

あたしがそうきくと信之介さんは首を縦に振つた。

「ガイアメモリは、生体コネクタ手術をして初めて効力が発揮する。もしこの手術しないで使用したらどうなるかはオラでも分からない。でも相当ヤバイことになると予想できる。しかも各メモリには使用者との相性があるんだ。入っている記憶に使用者の性質や願望などが近ければ近いほどメモリの力を強く引き出せる。でもオラの経験では中には相性が良すぎてメモリの力を過剰に引き出してしまう「過剰適合者」と言うものも存在しているんだぞ」

信之介さんの説明を聞いたあたしは背筋が凍つた。あたしの願望に近いガイアメモリと出会つてもそれを使つたらあたしは……。

「すいませーん」

「ん? 依頼人か?」

事務所に依頼人が来た。あたしと信之介さんは、ゲームをやめて依頼人会いに行つた。

「浮気調査ですか？」

依頼人からの話をメモしている信之介さんと今回の依頼人は、専業主婦の東 花子（あずま はなこ）さんにコーヒーを置いた。

「はい。この頃主人の帰りが遅く出張も多く……その夜の行為も最近相手にしてくれないので少し怪しくなつて……」

「それで主人の東 和樹（あずま かずき）さんが怪しくなつて調べし報告してほしいということですね」

「…………はい。もちろん私は主人を信じています。主人は浮気をするような人じやないと。…………でも不安になつてしまつて……」

「分かりました。その依頼、お受けいたしましよう。まず前金として30万お願ひします。成功報酬としては50万を。また失敗した時は前金をご返却致します」

信之介さんがそう説明するとあたしは書類とペンを花子さんの前に置いた。

「こちらは同意書です。サインをお願いします」

花子さんはサインをするとそのまま事務所を出て行つた。

翌日。花子さんは代金を振り込んだことを確認した信之介さんは、白いスーツを着直し白い帽子を被つた。あたしも動きやすい服装に着替えると信之介さんにについて行つた。

「あれが浮気をしているクソ野郎だな」

花子さんが東 和樹を見送った後あたしは信之介さんのバイク「スカルボイルダ」の後ろに乗つて東 和樹の後を追つた。
「東 和樹、50歳。職業は普通のサラリーマンか」「そしてあれが浮気相手の女か」

あたしはそう言つて信之介さんの隣に隠れて出張のフリをして浮気相手と一緒にいる東 和樹を覗いていた。

「それにしてもいい年したおっさんが浮気なんて情けない」

信之介さんがそう言うとあたしはジト目で信之介さんを見た。

「な、なんだよ奏ちゃん」

「…………信之介さんが東 和樹を尾行中に何回ナンパしてた

と思う？あたしが数え間違つてなかつたら10回はしてたよな？」

・・・・・あれは隠れ蓑のために

「何人が本気になつてましたけど？」

—

それにあたしは何回信之介さんの耳を引つ張つて連れて着ましたか
？」

【すいませんでした】

信之介さんはこう言う反面教師などころもあるけどこの人にあたしは命を救われたんだと思ひながら尾行を続けた。あたし達は様々な浮気の証拠を写真に収めながら追跡した。そして夜の22時。和樹と浮気相手はラブホテルに入つていつた。そこも写真に収めるとあたし達はアンパンと牛乳を食べながら出てくるのを待つた。

暇だなあ

—我慢して奏せやん。
探偵に必要なものは根気だ。
どんな仕事でもイ

ヘントでも我慢はいきものだぞ」

信之介さんかそう言つたその時たつた

突然の悲鳴にあたしは驚き信之介さんは牛乳を吹き出した。

「な、なんだ!?」

「突入するぞ奏ちゃん!!」

走りだした信之介さんを追うようにあたしも走った。途中ラブ

ホテルのスタッフに何か言われたけどあたし達は無視して走った。すると人だかりができる扉があつた。

「ぞいください!!」

信之介さんは扉の前に行き扉を蹴破つて中に入った。するとそこにはベランダに裸で返り血を見て震えながら座り込んでいる浮気女と裸で口から血を流している東 和樹がいた。

信之介さんは、上着を羽織らせるとすぐに東 和樹の脈を測つ

た。

「!!死んでる」

東 和樹は死んでいた。

Pの恐怖

ラブホテルの周りでは警察がウロウロしていた。あたしと信之介さんは、部屋前で立つていて他の客は各部屋で待機させられていた。

「信之介！」

すると1人のベテランそうな雰囲気をだした刑事が信之介さんに近づいた。いつたい誰だ？

「お久しぶりです汚田さん。相変わらず一発ギャグ発作病ですか？」

「ガチヨーン！！・・・・つて何やらせるんだ信之介!!」

「？信之介さん。この変な刑事と知り合いなんですか？」

「変な刑事!?」

あたしがそう言うと変な刑事はガーンというよな効果音がありそうな顔をした。

「ああ。この人は汚田 急痔（おだ きゅうじ）警部54歳。オラがアパートに住んでいた時に知り合った刑事だ」

信之介さんがあたしにそう説明すると汚田さんはあたしの方を見て驚いていた。

「信之介。結婚してたのか？」

「してませんよ。あるノイズ騒ぎの生き残りで保護したんだけど引き取り手がいなかつたからオラが引き取つたんだぞ」

「養子かあ」

そう言つて汚田さんはしやがんで手を出した。

「はじめまして。俺は汚田 急痔よろしくな」

「・・・・天羽 奏です」

あたしは握手をすると信之介さんが話しかけた。

「ところで汚田さん。今回の事件何か分かつたんですか？オラは浮気調査でずつと張つてたんですが正直いきなりこんなことが起きて驚いているんですよ」

「ああ。えつと。殺されたのは東 和樹50歳。ある会社の部長だ。現場にいた女性は、黒田 沙江（くろだ さえ）さん27歳。

職業は、東さんと同じ会社のO.L。信之介の言った通り黒田さんと東さんは不倫関係でいて今日はこのホテルで夜を過ごすつもりだつたらしい。黒田さんの証言によると突然苦しみだしていきなり血を吐いて倒れたらしくそのまま何をすればいいのか分からなくなつて混乱して悲鳴をあげた。そこへ信之介が突入して來たと言うことだ

「東 和樹の死因は？」

「予測からしておそらく毒だ。警察側は、黒田さんが犯人だと思つてるけど・・・・信之介どう思う？」

「・・・・オラが張つてた時はレストランとかにも行つてたけ毒を入れたような行動はしていませんでした。たまに1人になることもあつたがその時も特におかしな行動はありませんでした。」

「となるとこのホテルで毒入りの何かを飲ませたのか？」

信之介さんと汚田さんがそう話していた。

「とりあえず本人から聞いてみよう。奏ちゃん行くぞ

「はい」

あたし達は話を聞こうとしたけど相手が発狂して話ができるなかつた。あたし達は仕方なく帰ることになり明日朝から警察署に来るように言われた。

次の日の朝。あたしは信之介さんと警察署に來た。信之介さんは今回の事件のことと調査結果を報告書を徹夜でまとめていたせいで目の下にクマができていた。あたし達は女の警察官に取り調べ部屋に案内してもらつた。けど。

「お嬢さんはとても美しい。まるで絵画の絵が現実に現れたような美しさだ」

「そ、そのありがとうございます」

廊下の途中で信之介さんがナンパを始めた。

「どうです。今夜オラと一緒に食事でもいかがですか。いいワインが飲めるレストランを知っているんですよ」

「その・・・・ダメですよ。私には婚約者が・・・・」

「こんなところにまで来てナンパしないでください!!!信之介さん!!!」

あたしは、信之介さんの耳を引っ張ってやった。

「イタタタタタッ!! ちよつ奏ちゃん!! 離して痛いから!! ごめん!! マジごめん!! だから離して!!

そんなことをしていると喧騒が聞こえた。信之介さんは聞こえた部屋に着くとそこは取り調べ部屋だった。信之介さんが扉を開けるとそこには黒田さんと依頼主の東さん、そして1人のメガネをかけた冴えない男性がいた。

「あんたが!! あんたが私の主人を!!」

「落ち着いてください奥さん!! 暴力は!! 暴力はダメですよ!!」

「沙江!! どういうことだ!! お前は主張中じゃなかつたのか!? なんで男と一緒だつたんだよ!! しかもラブホテルで!!」

「・・・・・・」

黒田さんは、顔を下に向けて黙秘していた。

「うわっ。すっげえ修羅場。ていうかあの人も浮気してたんだ」

あたしがそう言うと。

「やつぱり報告書が無駄になつたな」

と、信之介さんがポツリと呟いた。

「それじゃあ今回の事件の関係者を集めました。私は刑事の汚田急痔です。まず殺害されたのは東 和樹さん50歳。職業は、サラリーマンで部長職についています。続いて専業主婦の東 花子さん42歳。夫の浮気調査の為に私立探偵の信之介君に依頼し東和樹さんの死亡を目撃。そして浮気相手の黒田 沙江さん。状況証拠によると犯人は黒田さんになりますが黒田さんの所有物には毒になるようなものは無かつた。夜の行為を行う為に強力な精力剤がありましたがそれを検査したところ毒物質は出てきていません。そして最後に黒田さんの恋人の鈴木 桂（すずき かつら）さん27歳。職業は、サラリーマンと」

あたし達はアリバイ調査が開始された。信之介さんは、疑いから外れていてアリバイを聞く側にいた。

「その…………私がホテルに入つたのは午後10時ごろだつたと思ひます。お風呂に入つてそして今日は…………その…………マニアックなことをしたいと私が言つたので午後10時30分ごろにベランダに出た瞬間いきなり苦しみだしてそしたら突然血を吐いて…………ウップ」

「私は野原さんに浮気調査を依頼した後ずっと家にいました。昼の12時に気を紛らわす為にベランダに出てガーデニングをしたりしていました。そして今朝の7時に警察から主人が…………」

「俺は昨日会社にいた。沙江が友達と旅行に行つてくるって言つて俺は冗談で土産を頼むつて言つてそして沙江もオッケーみたいな感じのノリで連絡をしてたんだ。その時間は確か午前9時20分だつたな。だけどまさか浮気をしていたなんて思わなかつたよ。帰つた時間？昨日は仕事が早く終わつて定時帰りができるから家に着いたのは午後7時だつたと思う」

この中でアリバイが証明できないのは黒田さんだけだつた。裏をとつたところ2人は本当に家に1日いたり定時に帰つて少しズレがあつたが7時に家に帰つていた。あたしは完璧に黒田さんが犯人だろつて思つた。

「・・・・・妙だな」

「？妙？なんか違和感でもあつたのか？」

「変なんだ。仮に本当に黒田さんが毒殺しているならなんで悲鳴なんてあげたんだ？しかもあんなザ・私が犯人ですみたいな状況で悲鳴をあげたら確実に犯人扱いされるのも分かるだろ？」

「ということは」

「犯人は別にいるのかもしないな」

信之介さんと汚田さんがそう話していると。

「警部！東 和樹の解剖結果が分かりました。やはり毒殺でした」

「やつぱりか」

「しかしこの毒殺、少し変なんです」

「変？どういうことだ？」

信之介さんか警察に聞くと汚田さんが彼にも話してくれと言つた。

「なんでこんなこなおっさんに・・・・えっと毒の成分なのですが成分が「タマゴテングダケ」だと思われます」

「タマゴテングダケ？なんだよそれ？」

「遅効性の猛毒キノコです。これを食べたら24時間以内にコレラのような症状を出すんですがその後すぐに治るんですよ。そしてそれから数日かけて肝臓と腎臓の細胞が破壊されて死に至る危険な毒キノコです」

「信之介さん。もしかして東さんが旦那さんにその毒キノコを食わせて殺したんじゃ・・・・」

「可能性はありそうだな」

信之介さんがそう言うと汚田さんがすぐに画像を持つてこいと言つて命令したが。

「待つてください!!だから変なんですよ!」

「何がだ？」

「タマゴテングダケの生息地はヨーロッパやニュージーランドが主なんです。日本では北海道でよく見られていますが本州で見られるのはごく稀なんです。わざわざこの毒キノコで毒殺を考えるには効率

が悪すぎるんです」

「…………つまりどう言う」と？」

あたしはだんだん話がついていけなくなつて混乱し始めた。

「つまりここら辺じや絶対に見られないキノコをどこでどうやつて見つけていつ東 和樹毒殺計画を立てたかつてことだ」

信之介さんは、あたしにそう説明した。そしてそれと同時にあたしは少し思つたことがあり信之介さんにこつそり聞いた。

「信之介さん。もしかしてドーパントが絡んでるんじや……」

「ああ。絡んでるかもな。だけど今回は証拠がない上に誰がドーパントなのか分からぬ。この中に犯人がいるとして誰がドーパントなのか……」

信之介さんがそう言つたときだつた。

「ん？」

「？信之介さん？」

信之介さんが何かに気付いた。信之介さんは、黒田さんの方に行つた。

「黒田さん」

「…………」

「あなたの携帯をオラに見せてほしいのですがいいですか？」

信之介さんがそう言うと黒田さんが首を傾げて素直に渡した。そしてそれを信之介さんが確認すると。

「…………分かつた」

と言つた。

「？どうしたんだ信之介？」

「犯人が分かつた」

信之介さんがそう言つた時あたしと汚田さんと近くにいた警察官は驚愕した。

「いや。実際に分かつたわけじやないけどもしオラの推理が当たつていたら犯人はあの人かもしね」

信之介さんは、そう言うと汚田さんに全員を集めるように言いオラは確認することがあるから少し出てくると言つて部屋から出て

行つた。

全員が集まると信之介さんは、東さん達の方を見た。

「今回の東 和樹さんの毒殺事件の犯人が分かりました」

信之介さんがそう言うと全員驚愕した。

「どういうことですか野原さん？主人はこの女に殺されたんじや」

「いえ違います。犯人は黒田さんじやありません。真犯人はあなたです。鈴木 桂さん!!」

信之介さんがそう言つて指をさした。え？ あの人人が犯人？

「はあ？ 何言つてんだ？ 僕が犯人？ そんな訛ないでしょ？ 僕にはちゃんとアリバイがある。その東 和樹つて男を殺すなんて無理だ！」

「そお。普通なら不可能。だけどこの男は可能なんですよ。あなたはメールで恋人の不倫旅行にお土産を頼んでいますよね？ この時あなたはさりげなくどこに旅行に行くのか前もつて知つてたんじやないですか？」

「あ、ああ。知つてたさ。だけどまさか不倫旅行だつたなんて思つてもなかつたけどな」

「いえ。あなたは知つてたんですよ。東 和樹さんと黒田 沙江さんが浮気をしていたことを」

信之介さんは、そう言つた。しつてた？ どういうこと？

「あなたは何らかの方法で偶然、黒田さんが浮気をしていることを

知つたあなたはとある方法で殺害に踏み切つたのではないですか?」「とある方法?何だよそれ?説明できんならしてみろよ!!俺は犯人じゃねえからどんな質問も正直に答えれるぜ」

「あなたはあるものを買つて いるんじやないですか?」

「あるもの?」

「そしてそのあるものを持つて いるのならあなたは確実に犯人である証拠になります」

信之介さんがそう言うと鈴木さん達の前に写真をばら撒いたそれは浮気の証拠写真だつた。その中の一枚を取り出すと信之介さんはそれを見せた。

「これはとあるレストランで2人が食事して いる瞬間です。ここを見てください。彼女はキノコが嫌いなようですね。パスタからマッシュルームを器用にどけて食べています。そして東さんはマッシュルームを食べています。この時にあなたは毒を盛つてたんじやないですか?」

「はあ?んなわけあるか。その場に俺はいないのにどうやつて毒キノコを入れるんだ?」

鈴木さんがそう言つた。

「ん?おかしいですね。何で毒キノコと分かつたんですか?」

「ああ?何言つてんだ?お前が毒キノコを盛つたつて言つたんじやねえか」

「言つてませんよ?オラは「彼女はキノコが嫌いなようですね。パスタからマッシュルームを器用にどけて食べています。そして東さんはマッシュルームを食べています。この時にあなたは毒を盛つてたんじやないですか?」と言つただけですよ。毒キノコを使つた毒殺なんて言つてませんよ」

「何だよそれ?紛らわしい言い方すんなよ。俺はあんたの言い方でてつきり毒キノコかと思つたんだ」

鈴木さんがそう言つた。あたしは大丈夫なのか心配になつて信之介さんを見た。だけど信之介さんは、余裕そうな顔をして いた。

「あなたが そう言うことも予測して います。ですがあなたは重大なミ

スを犯した

「ミス？」

「ええ。あなたはキノコを使っての毒殺ではなくキノコの胞子を使つて毒殺したんですよ」

これにはあたし達も「ハア」つてなつた。もうどう言うことか分んねえや。

「全く理解できねえな。胞子なんかでどうやつて殺すんだ？」

「勿論普通なら無理です。しかしあるメモリを使えばそれが可能なんですよ」

信之介さんがそう言つた瞬間だつた。鈴木の顔が凍りついた。

「・・・・・持つてるんですね？ガイアメモリを」

「？ガイアメモリ？」

汚田さんが首をかしげた。

「なんですか？ガイアメモリって？」

鈴木さんがそう言つたその時だつた。

「警部！本当にありました！鈴木さんの会社バックに妙なUSBメモリーが！」

それを見た鈴木さんが驚愕して振り向いた。あたしも警察官の持つてる物を見るとそれは確かにガイアメモリだつた。

「あなたはあのレストランの何處かにいたんですよ！そして胞子を操りピastaにタマゴテングダケの胞子をピastaに入れた。違いますか！」

！？

信之介さんがそう言つた時だ「ア！」た。鈴木さんは両膝をついた。

「・・・・・・・クソガアアアアア!!!!」

「なつ！」

!!!!!!

鈴木の野郎がガイアメモリを警察官から取り返した。突然のことで警察官も突き飛ばされガイアメモリを離してしまつた。

「こんなところで捕まつてたまるか！！」

『TOADSTOOL』

「まずい!!奏!!」

信之介さんはあたしを守るように抱きしめあたしを守つてくれ

た。すると鈴木は毒キノコのドーカントに変身した。突然のことには警察官や東さん達は思考停止しておりその隙に吹っ飛ばされて壁に叩きつけられた。だけど汚田さんだけは無事だった。

「汚田さん!! 奏を頼みます!!」

「ま、まて。待つんだしんちゃん!!」

信之介さんは、毒キノコのドーカントを追いかけた。

『SKULL』

「変身」

『SKULL』

信之介がスカルに変身するとスカルマグナムで攻撃した。光弾が当たったトードストールドーパントは、地面を転がった。信之介は、トードストールドーパントの首を掴むと無理矢理立たせた。
「ガイアメモリを解除しろ!! そして法の裁きを受けるんだ!!」

「はあ? 何言つてんの? 嫌に決まつてんだろ?」

「お前の恋人が奪われてつらい気持ちも分かる!!だからこんなことをするな!! 罪を償うんだ!!」

信之介はそう言つた。だが。

「あいつは恋人じやねえよ?」

「なに?」

「あいつはただの撒き餌。俺と付き合う女はわざと浮気させてそして幸せになつている瞬間を残酷な毒で殺すのが趣味なんだよ!! そして俺はその恐怖した顔を見るのがたまらなく好きなんだよ!! たまらねえぜ。俺は10人引きこもりにしてやつたし内3人は自殺に追い

込んでもやつたんだぜ」

鈴木がそう言つた時だつた。突然、信之介と鈴木の間にドクロのようなエネルギーが生まれそして鈴木は吹つ飛ばされた。

「どわっ!!な、なんだ!!」

鈴木は信之介を見た瞬間恐怖した。キレイていたのだ。仮面をつけていても信之介がキレイしていることを本能的に悟らせたのだ。

「このクズ野郎が」

『SKULL MAXIMUM DRIVE』

信之介は、大きくジャンプするとドクロのエネルギーを蹴つた。
「ギヤアアアアアア!!!」

鈴木は攻撃が当たると大きく爆発した。

「ライダーキック」

信之介が着地と同時にそう言うと信之介の前に鈴木の右腕とガイアメモリが落ちてきた鈴木右腕は地面に落ちガイアメモリは途中で砕け散つた。

「地獄でお前の罪を数えろ」

信之介がそう言うとスカルメモリを取り変身を解除した。

その後鈴木は行方不明となつた。ガイアメモリの件はニュースで報道されなかつた。そして東 花子は死んだ東 和也から遺産を相続しさらに黒田 沙江から慰謝料をたんまり頂きそしてその30%が野原探偵事務所に入つた。

Bでの会合

正月。各暦の年初のことである。文化的には旧年が無事に終わつたことと新年を祝う行事である。正月飾りをし、正月行事を行つたり御節料理を食べて、盛大に祝う行事だ。

あたしと信之介さんは事務所で信之介さん手作りのおせち料理を食べていた。信之介さんは中華料理が得意だから出されているのは手作り餃子や手作りシユウママイなどの中華料理ばっかりで日本のおせち料理ぽくなかったけどすっげえ美味かつた。あたしは栗きんとんの代わりに入つていてチャーハンを食べているとふと思つたことを信之介さんに聞いた。

「そういえば信之介さん

「ん? どうしたの?」

「信之介さんつて実家に帰らなくていいのか? あたし信之介さんの父さんと母さんのこと全然知らないし」

あたしがそう聞くと寂しそうな顔をして言つた。

「…………親父と御袋とは絶縁してるんだ」

「…………えつ?」

「御袋は、ある理由でオラを嫌つてるんだよ。オラがまだあの家に住んでた時は何回か殺されかけたこともあつたんだ。そして親父の方はオラが勝手に大学をやめて探偵の道を選んだ瞬間から絶縁されたんだ」

あたしは少し空気が重くなつたように感じた。いつもヘラヘラしていて優しくてあたしの事を考へてくれている信之介さんにそんなことがあつたなんて思つてもいなかつた。

「…………その…………すいません」

あたしと信之介さんは、おせちを食べ終えると外で一緒に買い物をしたりしていた。夜に事務所に戻るとあたしと信之介さんは、眠りについた。

夜中の12時。信之介は、こつそりと起き上がりと奏が寝ていてかどうか確認した後こつそりと外に出た。信之介は、夜中の街を歩いていた。そして30分ぐらい歩き続けると信之介は路地裏に入つたそしてそこにある階段を下りるとそこにはB A Rがあつた。信之介は扉を開けて入ると。

「いらっしゃいませ」

B A Rに入るとそこにはカクテルを作つてゐる1人の店員と黒いスースを着た青い髪の男がいた。

「…………來たか信之介」

信之介は、男の隣に座つた。

「ウオッカ。ストレートで」

「かしこまりました」

信之介は、葉巻を取り出し咥えると隣の男が右手を出し親指の指先が外れると火がついた。

「ありがとう…………風間君」

信之介は葉巻に火をつけでもらうとゆつくりと煙を吸いそして吐き出した。

隣の男の名は風間

トオル36歳。表側は、大手企業風間組を創設した天才社長。だが裏では名のある政治家の情報や大手企業の社長や幹部の情報を得て脅迫や暗殺、情報操作などを得意とするヤクザ風間組初代組長だつた。この男は信之介の幼馴染で定期的に会つていた。

「…………また新しい義手を作つたんだな風間君」

「前の義手も良かつたけど俺はこの新しい義手の方がフイットしてゐるんだ」

そう言つてあると書類を信之介に渡した。

「これが今回の報告書だ」

「…………」

信之介は、無言で受け取ると中身を見た。

「悪いけど今回も収穫はゼロだった。ガイアメモリの生産と販売する組織。闇の世界では噂になっているけどほとんど分からなかつた。本当にそんな組織が存在するかどうか不安になつてきたよ」

トオルは、そう言つてカクテルを飲んだ。ウォッカを置いた店員に信之介は目を向けると話しかけた。

「そつちの情報はどう？ マサオ君」

信之介がそう聞いた。

目の前の店員は佐藤 マサオ36歳。信之介の幼馴染で昔は泣き虫オニギリと呼ばれていたがもうその面影はなかつた。肩までかかる長い髪は後ろで縛つており片目を失明したのか眼帯をつけていた。

この男は表側は隠れ名店と呼ばれるほどのBARの店長なのだがある時間帯になると爆弾や拳銃、刀などの人を殺す武器を取り扱っている死の商人だった。

「…………私のところも同じだ。もしかしたらもつと深い闇の世界に奴らがいるのかもしれない」

「…………そうか」

信之介は、一気にウォッカを飲むともう一杯くれと言つた。

「…………俺たちなんでこうなつたんだろうな」

「…………」

「俺はいつか大企業の社長になる。その夢は叶つた。だけどまさかヤクザの組長に俺がなるとはな。…………マサオも美術大学卒業したら漫画家になるつもりだつたけど中退して行方不明になつたと思つたら俺より先に闇の世界に入つてたしなんでこうなつたんだろうな？」

トオルがそう言うと。

「・・・・・全部オラのせいだ」

信之介が帽子を置いてウオツカを飲んだ。

「あの時オラが・・・・・・」

「信之介!!」

信之介が何か言おうとした時だつたマサオが信之介の肩を持つと言つた。

「あれは誰も悪くない!!あの事件は全部ガイアメモリが悪いんだ!!そしてそれを生産した組織が悪いんだ!!だから信之介は悪くないんだ!!」

!!

マサオがそう言うと信之介は振り払つた。

「だとしても!!・・・・・オラが。あの時オラがひまわりを殺したこと

に変わりはない!!!」

信之介は、自分の両手を見るとそこには血で塗られた真っ赤な両手が見えた。

「オラがひまわりを殺したんだ!!最近だつてオラがネネちゃんを殺した!!東 和樹も殺した!!伊藤 達也を殺した!!犬山 麗子を

殺した!!佐々木 エリカを殺した!!まだまだオラが殺した人間はたくさんいるんだ!!そして何よりオラ自身が親父と御袋を・・・・・マサオとトオルは何も言えなかつた。

「なあ。お前の家族のこと娘に言わなくていいのか?」

「血が繋がつてなくてもオラにとつては大切な愛娘。奏ちゃんだけにはオラの罪を知つてほしくない。何よりオラは奏ちゃんに復讐は何も生まれないつて教えてきた。そんなオラが復讐に飲まれているなんて言えないしそんな姿を見せたくない」

「信之介」

信之介は、ウオツカを飲むとそのままBARを出て行つた。

Mのストーカー？

あたしは、信之介さんが作ってくれた麻婆豆腐を食べている時に新しい依頼人が来た。信之介さんは別件の仕事で昨日から事務所から出ていてここにいるのはあたししかいなかつた。あたしが出でみたら1人の女性がいた。

「えっ？」

女性はあたしを見て驚いていて外の看板をもう一回見てそして戻ってきた。

「ねえ。ここって野原探偵事務所でいいんだよね？」

「は、はい。そうですけど・・・・」

「つかしいな。信之介が結婚してるなんて聞いてないし子供までいるなんて聞いてないよ」

女性はそう言つた。あたしは気になつて声をかけてみた。

「あの信之介さんに依頼ですか？」

あたしがそう言うと女性はこっちを見た。

「ん？ああ。まあ依頼って言つたら依頼なんだけど・・・・」

女性はバツが悪そうな顔をそう言うと。

「とりあえず中に入つてください。コーヒーを出しますから」

あたしは、そう言つて女性を中に入れた。あたしは、女性にコーヒーを置くと。

「ねえ。聞きたいんだけど君つて信之介の子供？」

と、聞いてきた。

「あたしはこの事務所で信之介さんの手伝いをしてるんだ。ノイズのせいであたしには行く場所がなかつたんだけど信之介さんが引き取つてくれたんだ」

「ほお。つてことは義娘つてことか。信之介がねえ」

女性はそう言つてコーヒーを飲んだ。すると。

「ただいま」

信之介さんが帰つてきた。信之介さんは、壁についている帽子掛けがけて帽子を投げてかけると女性を見て驚いていた。

「むさえちゃん」

「信之介！久しぶり!! 大きくなつたねえ!!」

「むさえちゃんも久しぶり!! こんな所に何しに来たんだ?」

女性は信之介さんの肩を叩いており信之介さんも笑顔を浮かべていた。

「それじやあ改めて。オラは、野原探偵事務所所長兼私立探偵の野原

信之介。そしてオラの助手兼愛娘の天羽 奏だぞ。奏ちゃん。

彼女は、小山 むさえ(こやま むさえ)。御袋の妹でオラの叔母にあたる人だ」

信之介さんはあたしにそう言うとあたしは挨拶をした。

「天羽 奏です」

「あたしは小山 むさえ。フリーだけどプロのカメラマンだよ」

むさえさんは、そう言つてあたしに握手をした。

「ところでむさえちゃん。今日は何しに来たんだ?」

信之介さんがそう聞くと少し暗い顔をした。

「信之介。あたしを守つてくれない?」

「? 守る? どういうこと?」

信之介さんは、首を傾げた。あたしも首を傾げた。一体何から

守つてほしいんだろう?

「実はこれ見てほしいんだ」

むさえさんは、そう言つて折りたたまれた紙を渡した。あたしと信之介さんは、それを見た時驚愕した。それは脅迫の手紙だった。

『今すぐにお前が撮つた写真を全て燃やせ。さもなくばお前を殺す』

ありきたりな脅迫の手紙だった。しかしその手紙を見てむさえ

さんは不安そうな顔をしていた。

「……最初はただのイタズラだと思ったんだ。だけど最近仕事で外出したらなんだか見られているような気がしたんだ。一応警察に相談したんだけど証拠みたいなものなんかないから全然まともに相手してくれないし」

「？脅迫の手紙を見せなかつたのか？あれだけでも十分に脅迫罪として見られるし警察も動くはずなんだけど」

「もちろん見せたよ。だけどこんなイタズラは今の時代どこでもあるって言われて相手にしてくれなかつたんだ。もう頼れるところはここしかなくて……お願いだ信之介。助けて」

信之介さんは立ち上がりと白い帽子を被つた。

「50代のおばさんにそんな涙目で頼られても嬉しくないけど……女性を泣かすようなクズを野放しにするわけにはいかない。何よりむさえちゃんの依頼だ。喜んで引き受けるぞ」

信之介さんがそう言つとすぐに動き出した。

次の日、信之介さんはむさえさんの仕事道具のカメラを持つて事務所に来た。

「今日から事件解決までむさえちゃんをこの事務所に泊まらせることにした。仲良くしてくれよ奏ちゃん」

「勿論だ信之介さん」

むさえさんは、しばらくの間この事務所に居候させることになつた。その間、信之介さんはむさえさんの仕事や出かけるときにさりげなく一緒に出かけたり後ろから見守りながら歩いていた。それが1週間続いた。だけど信之介さんは、怪しい人物も尾行しているような

人物もいなかつたと言っていた。

「やっぱりイタズラじゃないのか？」

信之介さんはむさえさんにそう言うと。

「そんなことない！でも確かに最近そんな感じはしなくなつたけど……」

「…………奏ちゃんの方はどうだつた？」

信之介さんがあたしに聞いてきた。

「…………写真をずっと見ていたけど特に怪しそうな人は写つてなかつた。あたしも信之介さんと同じでやっぱりイタズラだと思つてるんだけど」

あたしがそう言うと信之介さんは少し考えた。

「…………まさか。少し出かけてくる」

信之介さんが事務所から出て行つた後あたしとむさえさんで色々話した。信之介さんの子供時代の話やむさえさんが信之介さんの家に居候していた話をした。あたしも信之介さんに救われた話や信之介さんとの思い出も話した。すると信之介さんが帰つてきた。右手にはトランシーバーのような機械があつた。

「知り合いから借りたんだ。まさかとは思うが…………」

信之介さんは、むさえさんのカメラにその機械を当ててみると。ヴィー！ヴィー！ヴィー！

音がなつた。あたしとむさえさんは、どう言うことが分からず機械の音に驚いていると。

「…………やっぱりか。通りで犯人はやめたわけだぞ」

信之介さんがそう言うとあたし達を別の部屋に連れて行つてそこで話した。

「今回犯人が現れなかつたのは至極簡単だつた。むさえちゃんは盗聴されてたんだ」

「えつ？ 盗聴？」

むさえさんは驚いていた。まさかカメラに盗聴器が仕掛けられているなんて思つていなかつたんだ。

「おそらく犯人はむさえちゃんの撮つた写真の中にいる。それかいつ

も写真の取引をしている会社の誰か」

信之介さんは、考え込むようにイスに座った。

「でも何のために盗聴なんか」

あたしがそう言うと。

「あつ」

むさえさんが何か思い出したような声を出した。

「? 何か心当たりがあるのか?」

「いや心当たりじゃないけど・・・・・・実はある高校の修学旅行のカメラマンとして仕事に行つた時なんだけど・・・・その時にもう1人男のカメラマンがいたんだ。もしかしてその人が・・・・」

「!? その人の名前は!? 特徴は!?」

「えっと・・・・確か・・・・セプレンヌ・C・数馬って名前だつた。金髪の短髪とドクロのイヤリングをしてた20代後半ぐらいの男だつた」

Mのストーカー事件解決

信之介さんは、セプレンヌ・C・数馬という男を詳しく調査し始めた。信之介さんは、むさえさんにしばらくこの事務所から出ないよう言うと信之介さんは一人で事務所を出た。あたしはセプレンヌ・C・数馬という男がここに来たらむさえさんを守るように言われて事務所に待機していた。信之介さんは数日かけてセプレンヌ・C・数馬のことを調べた。しかしこの男は名探偵の信之介さんをかなり混乱させていたんだ。信之介さんが調査したところによるところの男は特に怪しい行動はしておらず仕事も現場の行き帰りを続けていただけだった。

信之介さんは、盗聴魔としての方向で調査をしなおしたけど他の仕事仲間や同じ現場に居合わせたカメラマンに盗聴器を仕掛けるようなそぶりもなくまたカメラをすり替えるような行動もしていくなかつた。信之介さんはセプレンヌ・C・数馬が住んでいるアパートに友人として入った時も盗聴器は無く数台のカメラも調べても盗聴器は発見できなかつた。ドーパントの可能性も考えガイアメモリを探したけどどこにもなくより謎に包まれていつた。

「うーん。調べても怪しそうなところはなかつたしイタズラだとしたらむさえちゃんのカメラに仕込まれていた盗聴器が説明できないし……犯人は一体誰なんだ? むさえちゃんの何を黙つて

いてほしいんだ?」

信之介さんはそう言つて信之介さんの大好物のチョコビを食べながらホワイトボードに貼つてある写真や行動の流れとにらめっこして考えていた。信之介さんは、難しい依頼が来るとチョコビを食べて糖分を摂取して頭を働かせているんだ。あたしとむさえさんは、信之介さんが作つてくれたサンドイッチを食べていたけどこここのところ信之介さんはコーヒーとチョコビしか食べてないからあたしはかなり心配していた。

「…………むさえさん。なにか他に心当たりないんですか?」

あたしがそう聞くとむさえさんも頭を悩ませた。

「そう言われても心当たりないそもそもなんなの?写真を燃やさなかつたら殺すつて。しかもストーカーつて。本当訳わかんない」

むさえさんがそう言うと信之介さんは、テーブルに置いてある写真をもう一度見始めた。

「どれもこれも普通にいい写真だし犯人につながるようなものなんて何一つなさそうだしどうなつているんだ?」

信之介さんはそういうつてコーヒーを飲んだ。あたしは何気なく新聞を読んでいた時に嫌な記事を見つけた。

「うわっ。バラバラ殺人事件の犯人がまだ見つかってないつて書かれてる」

あたしが何気なくそう言つた時だった。信之介さんは、凄い勢いでこつちを見た。

「…………今なんて言つた?」

「ん?」

「?どうしたんだ信之介さん」

「いや、今バラバラ殺人事件とか犯人とか言わなかつた?」

信之介さんがあたしにそう聞いてきた。あたしは頷くとすぐに写真を見だした。そして一枚の写真を見ると。

「…………間違えた」

つて言つた。

「間違えた?どう言うことだよ信之介」

「オラはてつきりセブレンヌ・C・数馬が犯人だと思つたけど違つたんだ。今回のストーカー事件の犯人。それはこのバラバラ殺人事件の犯人だ!!」

あたしとむさえさんは驚いた。むさえさんは腰を抜かして震えていた。

「な、なんでそいつが犯人だつて分かるんだ?」

「簡単だ。多分この写真だろ」

それはむさえさんが仕事で撮つた修学旅行のクラス写真だつた。その写真をあたし達に見せてきた。

「この写真がどうしたんだよ?」

むさえさんがそう聞くと。

「分からぬのか?この写真の違和感に」

と、信之介さんが言つた。あたしももう一度写真を見たけど分からなかつた。特におかしいところなんてない普通の写真だつた。

「オラも分からなかつたけど今分かつた。犯人はまだ分からぬいけどこの写真に写つている誰かが犯人だ」

それを聞いてあたし達は、驚いた。

「ヒントはこの写真の背景だ」

信之介さんは、4枚の写真を並べた。そして右端の写真を指差すと言つた。

「この写真。やたらと多くないか?カラスが」

「カラスが?そんなこともあるでしょ?カラスが多いなんて別に珍しく「奏ちゃん」……?」

「カラスの集まる理由つてなんだと思う?」

「そ、それは確か生ゴミを食べる為とか……あつ!!」

あたしは気づいた。そう考えれば確かにこの写真はおかしかつた。

「?なに?どういうこと?」

むさえさんはあたし達に聞いてきた。

「カラスは生ゴミや動物の死体を食べる習性がある。またカラスは、夜に集団で眠る習性があつて一度どこかに集まつてから巣に戻るら

しい。この写真は午後1時に撮つたもの。それを考えたら朝の方で考えたら遅いし夜の方では早すぎる。この写真に写つてゐる大量のカラスはもしかしたらこちら辺周辺にカラスが大量に集まるほどのが生ゴミがあつたか或いはなにかの死体があつたかだ。そしてそのバラバラ殺人事件の現場は偶然にも写真が写つてゐる場所だつたんだ

信之介さんは、そう言つてあたし達を見た。

「……偶然にしてはできすぎてないか？」

信之介さんはそう言うとすぐにその写真を持つて事務所から出た。そして1時間で帰つてきた。信之介さんは「後は警察の仕事だから警察が真犯人を逮捕するまで待つていよう」つて言つた。

そして3日後。テレビで4人の生徒がバラバラ殺人事件の犯人として逮捕された。殺害した犯人のリーダーは、直江 純（なおえじゅん）17歳。そして取り巻きの石川 大輝（いしかわ だいき）17歳、高雄 竜太（たかお りゆうた）17歳、如月 晃（きさらぎ あきら）17歳だった。4人の顔と出身高校がモザイクで隠されて報道されていた。もともと4人は犯行は行なつていなかつたが修学旅行でも隠れてある1人の男子生徒をいじめ続け自殺に追い込んだ。そしてその現場を見た4人は怖くなりノコギリで体をバラバラにして修学旅行クラス写真で撮つた山の中に死体を

あちこちに隠したらしい。そしてその写真をむさえさんが撮ついたこととカラスの習性を知り慌てて行動を起こした様だ。

4人は脅迫罪と死体損壊・遺棄罪で捕まつたことでむさえさんのストーカー事件は解決した。夜は事件解決パーティーが行われて信之介さんの得意な中華料理どんどん出てきた。むさえさんは、楽しそうにビールを飲んでいてあたしはオレンジジュースを飲んでいた。信之介さんもむさえさんと一緒にビールを飲んでいた。そしてあたしは眠くなると先に寝室に行つて眠つた。

午前3時。あたしは喉が渴いたから水を飲みに行こうとした。すると信之介さん達がまだむさえさんと飲んでいた。そしてあたしはこつそりと盗み聞きした時だつた。あたしは信じられないことを聞いた。

「信之介。たまには姉ちゃんと義兄さんに会いに行つたらどうだ?」「無理だ。オラはすでに絶縁されてるんだ。今更会えない」

「確かに姉ちゃんは信之介を恨んでるけど仕方なかつたんだろう?ひまわりのことだつてあれば事故だつたんだろう?」

「違う。あれはオラが殺したんだ。ひまわりを殺したのはオラだ。だからオラはひまわりの仇を取るために探偵になつた」

「…………義兄さんはそんなの望んでない。義兄さんは、信之介が幸せに暮らせるように大学に入らせたんだ。今も義兄さんは信之介のことを気にしてるし……それに……」

あたしは寝室に戻った。信じられなかつた。あたしは信之介さんに妹のひまわりさんをことを聞いていた。ある事件に巻き込まれて死んだつて。けどひまわりさんを殺したのは信之介さんだつた？そして仇を取る？それつて復讐つてことか？あの時の信之介さんはあたしの知つている信之介さんじやなかつた。

「…………復讐をしても家族は帰つてこないぞ？…………フザケンナよ。信之介さんだつて復讐しようとしてるんじやないか。だったらあたしだつてノイズどもに復讐してもいいじやねえか」

あたしは泣きながらそう言つた。

この時あたしは少し信之介さんを信じられなくなつた。だけどこの暗い感情があの悲劇を起こすなんてあたしは夢にも思つていなかつた。

Kの悲しみ

ガシャーン!!

あたしは信之介さんに向けてコップを投げつけた。あたしが投げたコップは割れてその破片が信之介さんの額を切つた。信之介さんは血が出てるところを手で抑えてあたしに話しかけてきた。

「落ち着いて奏ちゃん!! オラはただ「ふざけんな!!」つ!?」

「あたしは信之介さんを信じてた!! あたしをノイズから助けてくれてあたしを育ててくれて・・・・あたしは信之介さんを信じてたのに・・・・なんでだよ!! 信之介さんだつてひまわりさんの復讐のためにガイアメモリ使つてるじやねえか!! それならあたしにも寄越せよ!! くれよ!! ガイアメモリ!! ノイズに復讐させろよ!!」

「待つんだ奏ちゃん!!あの時も言つただろ?復讐しても家族は戻らないって。ガイアメモリの危険性も話したはずだ!!」

信之介さんは、あたしの肩を掴んでそう言つたけどあたしはその肩を振り払つた。

「何が復讐しても家族は戻らないだよ。じやあなんで信之介さんはスカルメモリで戦つてんだよ!! しかもあのメモリで人を殺してるじやねえかよ!!」

「・・・・つ!!!」

「あたしが半人前だからつてガイアメモリもくれないし・・・・所詮あたしはあんたの子供じやない!! どうせ保護されただけの子供だよ!! あんたがあたしのことをただ義務的に育ててくれるだけ。そんな奴があたしの父親顔なんかしてんじやねえよ!!!」

「つ!!!」

パチーン!!

あたしは信之介さんに頬を張られた。あたしは張られた頬を抑え信之介さんを睨み付けるとあたしは事務所を出て行つた。

「…………」

オラは奏ちゃんを張つた手を見ていた。奏ちゃんの気持ちも分からぬない。だけどそれでもオラは奏ちゃんを。大切な愛娘をオラと同じ道を歩いてほしくなかつた。

「もう何が正しいのか分からぬぞ」

オラはそう言うと携帯が鳴つた。出てみると。

「らしくないわね。あなたがそんなんにへこむなんて」

あの女から連絡が来た。

「…………何の用だシユラウド？」

オラがそう言うとシユラウドはフフフと笑つていた。

「フイー姉さんの居場所が分かつたわ。あなたの大切な妹が死んだ元凶の居場所をあなたに教えようと思つて連絡したのよ」

「!？」

「時は来たわ。やり方は全てあなたに任せよ。でも、1つだけ私からの依頼を頼まれてくれないかしら?」

「?お前が頼み事なんて珍しいな」

「ある女の子を救つてほしいの。多分世界中でいる優秀な探偵の中で

もこの依頼を頼めるのはあなただけよ」

「…………詳しく話せ」

あたしは公園のベンチに座っていた。あたしは信之介さんに酷いことを言つた。でもあたしは信之介さんを信じることができなくなつていて。あたしが大切ななんでガイアメモリをくれないんだよ。やつぱりあたしは本当の娘じゃないから…………。

「君は…………天羽 奏ちゃん？」

あたしが悩んでいる時に1人の男性が話しかけて來た。

「誰だよあんた？」

あたしは警戒してそう聞いた。

「…………私は、佐藤 マサオ。信之介の幼馴染だ」

マサオさんがそう言うとあたしの隣に座つた買い物帰りなんか買い物袋の中には飲み物や食料がたくさん入つていた。

「君のことは信之介から聞いているよ。まさか会えるなんて思つていなかつたけど」

マサオさんがそう言つて買い物袋からコーラを取り出してそれをあたしに渡した。あたしは受け取るだけで飲まなかつた。マサオさんは特に気にしてなくてあたしに聞いてきた。

「信之介と喧嘩でもしたのか？」

「…………あんたには関係ないだろ？」

あたしはそう言うとマサオさんはへラへラと笑つて「確かに」つて言つた。

「…………あたしは隠し事をされていた。あたしは信用されてなかつた。信之介さんがひまわりさんを殺したこととかあたしに話してくれなかつた。あたしはどうせ信之介さんの子供じゃないから…………」

あたしがそう言うとマサオさんはため息をついた。

「それは違うよ奏さん」

マサオさんがそう言うとマサオさんはあたしの前に来てあたしの目線に合わせた。

「信之介は、奏ちゃんの事を本当の娘のように愛してた。私のB A Rに来た時も最近は奏ちゃんの話をすることが多かつた」

「…………」

「それに最近の信之介は戻つてるんだ」

「? 戻つてる?」

マサオさんはあたしの隣に座り直すとあたしに話始めた。信之介さんの過去を。そして信之介さんの罪を。

Sの過去

信之介がスカルになつたのはまだ高校3年生だつた時だ。私と信之介は、アクション高校、そしてもう1人の幼馴染の風間 トオルっていう男は霸道高校つて言う高校を卒業してそれぞれの進路が決まつていた。けど風間は東大の受験に失敗して三流の大学に入学することになつて落ち込んでいたんだ。そんな風間を慰めると言う意味で私と信之介で卒業旅行を計画しそれを風間に話したんだ。風間がOKを出した瞬間私たちは行動に移した。

私は、本屋でバイトをし信之介はラーメン屋でバイトをし風間は金持ちだつたから親に出してもらつていたんだ。そして旅行の資金も溜まつた時に信之介の母さんが妹のひまわりも連れて行つてあげてほしいと言つたんだ。当時のひまわりちゃんはある悩みがあつたんだ。その悩みが部活関係だつたんだ。

ひまわりちゃんは勉強はあまりできなかつたけど陸上でエースになつっていたんだ。そのひまわりちゃんが新記録を出せずエースの座も危なくなつていてすつぐく悩んでいたんだ。信之介は最初は断つていたんだけどひまわりの分は信之介の母さんが出すつて言つてからしぶしぶだが付いてくる事を了承したんだ。その時のひまわりちゃんは綺麗だつた。信之介は、赤いシャツの上に黒いコートとジーパンだつたけどひまわりちゃんはロングスカートに黄色いセーターを着ていたんだ。その時のひまわりちゃんは不思議な色気みたいなオーラを出していたんだ。…………ごめん。少し脱線したな。

私達がその時に行つた場所は京都だつた。私達は京都で3泊4日の旅行をしたんだ。ひまわりちゃんがマイコさんになつたり風間が歴史資料館に行つたり信之介が抹茶を飲んだりと楽しんだ。そう。楽しかつたんだ。だけどその旅行も次の日には地獄に変わつたんだ。昨日まで元気だつたひまわりちゃんが突然暗くなつたんだ。昨日までの元気が嘘のようだつた。信之介は流石に心配になつてひまわりちゃんに話しかけた時ひまわりちゃんが信之介を突き飛ばしたんだ。

信之介は怒つてひまわりちゃんの胸ぐらを掴むとひまわりちゃんが言つたんだ。

「私はお前らみたいて香氣に楽しんでる暇なんてないんだよ!!もしかしたら陸上のエースを奪われるかもしれないんだよ!!そんなの嫌だ!!私はエースなんだ!!あの陸上には私が必要なんだ!!能天氣なお前らと私を一緒にするな!!」つて。

その時にひまわりちゃんはどこで買つたのか分からぬけどガイアメモリを取り出したんだ。その時は私達も何をしようとしてるのか分からなくて呆然としていた。今思えばあれはたぶん蛇。スネークドーパントだと思う。ガイアメモリもスネークつて言う音声を出してたし怪物の姿も蛇だつた。突然のことだつたから私は怯えてとっさに押入れに隠れたんだ。だけど信之介は、突然のことに対応できず殺されそうになつたんだ。その時に風間は信之介を庇つた。そして風間はひまわりちゃんに右腕を喰われたんだ。ひまわりちゃんは旅館から逃げ出したんだ。信之介は我を取り戻すと急いでひまわりちゃんを追いかけた。私は風間を近くの病院に連絡を入れて救急車を呼んだ。結果、風間は入院することになつた。私と信之介は警察から事情聴取を受けたけど警察は私たちの言葉を信じなかつた。でもそれは当たり前だつたんだ。USBメモリのようなもので化け物になつたなんて誰が信じる?まあ、そんなことがあつて旅行は中止になつた。

風間の母さんは右腕をなくした風間を見てかなり取り乱していた。そして信之介の所も混乱していた。あの日から私と信之介はあの旅行費を全てつぎ込んでひまわりちゃんを探した。だけど見つからなかつた。信之介の母さんと父さんも協力してひまわりちゃんを探した。そして私も信之介に協力して探したんだ。大学生活が始まつた時もひまわりちゃんは見つけられず私と信之介は大学が休みの時に探し続けた。そんな時だつた。あの女にあつたんだ。

「あの女?」

「……ああ。正直言つて私から見たらあの女はかなり気味が悪かつた」

あたしはマサオさんの話を聞き続けた。

私と信之介がひまわりちゃんを探している時にノイズに襲われたんだ。そんな時に私と信之介を助けてくれたのはシユラウドと言う女だ。顔は包帯をしていて分からなかつたがサングラスと黒いドレス。そして銀色の髪をしたあの女が私達を助けてくれた。そしてあの女が言つたんだ。

「野原 ひまわりを救いたいのならこれを使いなさい。しかしこれを使えばあなたと私は共犯者になる。それでも野原 ひまわりを助けたいですか?」

そう言つて信之介に渡したのはロストドライバーとスカルメモリだつた。信之介はロストドライバーを腰につけるとスカルメモリ

をセットしてスカルに変身したんだ。当時の私はかなり驚いたよ。そして信之介はその力でノイズを倒した後ひまわりちゃんを見つけたんだ。ひまわりちゃんはスネークドーパントに変身すると信之介もひまわりちゃんを助けるためにスカルに変身した。この時から私達の運命は決まってしまったのかかもしれない。あの時、信之介はひまわりちゃんを救うためにひまわりちゃんにマキシマムドライブをくらわせたんだ。結果ひまわりちゃんは変身解除させることに成功した。だけどその時に私と信之介はとんでもないことに気がついたんだ。それはひまわりちゃんが息をしていなかつたんだ。私たちはすぐに入工呼吸をしたがダメだつた。その時にシユラウドが現れてこれはどう言うことが聞いたんだ。そしたらあの女はこう言つたんだ。「スカルはメモリブレイクをすると同時にメモリの変身者を殺害する力がある。だから聞いたんだ。私と共犯者になる勇気があるか」って言つたんだ。信之介は泣いた。少なくとも私は信之介があんなに泣いている姿は初めてだつた。

それから信之介は変わつてしまつたんだ。信之介だけじゃない信之介の母さんも変わつてしまつた。信之介の母さんは、ひまわりちゃんの死を信之介1人の所為にしたんだ。信之介の父さんは信之介を庇つていたが信之介は自分がひまわりを殺したと言つたんだ。信之介は警察に捕まつたけどひまわりちゃんの死に方は普通じやなかつた。だから証拠不十分で無罪になつたんだ。それから信之介は笑わなくなつた。ひまわりちゃんの死は事故死として扱わられたんだ。だけど信之介は自分がひまわりちゃんを殺したと言つてずつとその罪に縛られたんだ。信之介の母さんは信之介を憎むようになり何度も殴られたんだ。だけど信之介は抵抗しなかつたんだ。信之介の父さんが仕事から帰つて帰つてくるとすぐに助けてくれたらしいけど信之介はそれを望まなかつた。ひまわりちゃんを殺してから信之介は死を望むようになつた。信之介の母さんが包丁を持って信之介を殺そうとした時も受け入れたんだ。運良く信之介は死ななかつたんだがそれでも信之介は生きていること自体に苦しみ続けた。そんな時に信之介は、信之介の父さんに言つたんだ。大学を辞めて探偵

になるつて。

信之介の父さんは反対したが信之介はひまわりちゃんの仇を討つと言つて聞かなかつた。信之介の母さんはとつとと出て行けつて言つたらしい。けど信之介の父さんはせめて大学を卒業してから探偵になつてくれと言つたらしいけど信之介はそれを拒否したんだ。それから信之介の父さんもキレて信之介と絶縁したんだ。

その時には私も母さんに内緒で美術大学を辞めて行方をくらませ今のがいるんだ。私独自で集めた情報を信之介に渡す。私にはこんなことしかできなかつた。信之介の母さんは1年後に精神がかしくなつたんだ。今は、信之介の父さんと小山 むさえが面倒をみているらしい。信之介の母さんは信之介が5歳児だつたころとひまわりちゃんがまだ0歳児だつた頃の時間に生きてているんだ。そして信之介の父さんは今も見捨てずに小山 むさえと小山 まさえ、そして信之介の母さんの友人から力を貸してもらつているらしい。

「信之介は、あれからずっとガイアメモリの後を追つていたんだ。ひまわりちゃんの仇のために。復讐のためだけにシユラウドっていう女と手を組んでガイアメモリを探し続けたんだ。その時の信之介はまるで鬼のようだつたんだ」

あたしはマサオさんからその話を聞いて信じられなかつた。信之介さんにそんな過去があつたなんて・・・・そして信之介さんが鬼になつていたなんてあたしは全然知らなかつた。

「だけどあたしの知つてる信之介さんは「だから元の信之介に戻つた

んだ奏ちゃんのおかげで」？」

あたしはどういう意味か分からなかつた。

「ある日、信之介が私と風間に言つたんだ。ノイズのせいだけオラに娘ができたつて」

「昔みたいに笑つてそして喜んでいた。奏ちゃんのことが可愛くてそして喜んでいるところを見るとすぐ嬉しくなつて悲しんでいるところを見るととても辛かつたつて言つてたんだ」

マサオさんは嬉しそうにそう言つた。

「信之介は今も復讐のために戦つてるつていつてたけど本当はもう変わつてることに気づいてるんだと思う」

「・・・・・・・・・・

「信之介の真の復讐は可能な限りガイアメモリを破壊してそして少しでも奏ちゃんが幸せになつてほしい。奏ちゃんをガイアメモリから守る。それが今の信之介がやろうとしてる復讐だと思う。奏ちゃんの未来のために戦う。それがひまわりちゃんへの償いで今まで殺してきた人達への償い。これがガイアメモリへの復讐だと私は思つてゐるんだ」

「・・・・・・・・・・あたしはバカだ」

「？奏ちゃん？」

「すいません!!用事があるので帰ります!!」

「・・・・・・ああ。しつかり信之介に謝るんだよ」

「はい!!」

「そうだ。信之介さんだつて辛かつたんだ。ひまわりさんはノイズに殺されたんじやなくて人に殺されたんだ。信之介さんは復讐にとらわれてたとしても・・・・・今の信之介さんはあたしのために戦つていたんだ。そしてこの町のために戦い続けていたんだ。そんなことも気づかないなんて。

「本当になきねえよな!!このバカは!!」

あたしはそう言つて信之介さんのもとに走つた。

オラは壁にかけている白い帽子を被つてオラの宝物を胸ポケツ
トに入れた。

「・・・・・奏ちゃん」

オラの心残りは愛娘の奏ちゃんだった。最後に一目、奏ちゃんを
見ておきたかった。

オラは念のために用意した遺言書を机の中に入れた。そしてオ
ラは事務所を出た。そして。

「・・・・・さようなら奏ちゃん」
と、言つた。

N 悪夢の夜

「信之介さん!!」

あたしは事務所に帰つて來た。だけど信之介さんはいなかつた。部屋を見回した時いつも壁にかけていた白い帽子が無かつた。信之介さんは仕事に行つたんだと思つたあたしは信之介さんが帰つて来た時に謝ろうと思つた。その時だつた。事務所に電話がきた。あたしは電話に出ると。

「天羽 奏ちゃんね? 所長は?」

相手は女だつた。

「誰だよあんた?」

「・・・・・・依頼人よ」

「へ?・・・・・・あ、えと、信之介さんは今いません」

あたしがそう言うと。

「そう」

相手はそれだけを言つた。そして続けざまに聞いてきた。
「ねえ。ソファーの下にトランクケースがないかしら?」

「?トランクケース?」

あたしは受話器を置いてソファーの下を覗きに行つた。見てみると何かがあつた。あたしはそれを取り出すとたしかにトランクケースがあつた。あたしは受話器を取つて答えた。

「ありましたけど信之介さんの忘れ物ですか?必要ならそちらに届けに行きますけど?」

「・・・・・・やっぱり。相変わらずあの子はそれが嫌いなのね」

「?どういうことだよ?」

あたしは依頼主の言葉に首を傾げた。

「・・・・・・それは地獄から抜け出すための切り札になるはずだつたのだけど・・・・・・信之介らしいと言えばらしいわね」「?どういうことだよ!あんた一体何を言つてるんだよ!」

あたしはそう言うと依頼主は電話を切つてしまつた。

「・・・・・・地獄ってどう言うことだよ?信之介さんは一体どんな事

件に関わったんだよ」

あたしはそう言つてトランクケースを見た。あたしはほつとくことができなかつた。

「信之介さんの助手はあたしだけなんだ。あたしが持つてかなきや」

あたしはそう言つて事務所を飛び出した。

これが悲劇の始まりだと知らず。

あたしは信之介さんの居場所を突き止めた。ある港から船に潜り込んでいたらしい。あたしがその港に着いた時にはすでに夜だつたけどその港はかなり様子がおかしかつた。中型の船に数台のトラックが入ろうとしていてその周りには黒服の男がかなりいた。ど

う見ても口クな人間じやなかつた。あたしはスキをついてトラックの下に潜り込みしがみつくとなんとか船内に潜入できた。するとすぐには船は出航した。

あたしはこつそりと船内を歩いているとこの船の目的地のような島が見えた。でもその島はおかしかつた。その島はかなり小さい島であんなところに大量の物資を持ち込んで意味がないような島だつた。その時だつた。

バチ!! バチバチバチバチバチバチ!!!! バチチ!!

「うわっ!?」

突然妙な音が鳴り響いた。あたしは驚いて思わず声をあげた。幸いそこには誰もいなかつたからなんとかなつた。そしてあたしは目を疑つた。

その島にはさつきまでなかつたはずだつた。そこにはでつかいビルが建つていたんだ。

「な、なんだよこれ?」

あたしがそう言つて下がるとパイプを蹴つてしまつた。そして近くにいたのか1人の黒服があたしに気がついた。

「誰かいるのか!?」

「やつべ」

あたしがそう思つた時だつた。突然誰かがあたしの口を手で覆つた。そして狭い通路に引きずられると同時に誰かがあたしの前に出ると。

パシユツ。

誰かが黒服の男を銃で撃つた。

「!!」

あたしは思わず悲鳴を上げようとしたら。

「しー。静かに」

そう言つてあたしの口から手をゆっくり離した。あたしは後ろを見てみると。

「信之介さん!」

そこには白いスーツと白い帽子を被つた信之介さんと右腕が義

手の男がいた。そしてその後ろには武装した10人の男がいた。

「…………なんでここにいるんだ奏ちゃん」

信之介さんにそう言われてあたしは言葉を詰まらせた。すると義手の男が信之介さんに話しかけた。

「信之介。どういうことだ？ なんでお前の娘がこんな危険なところにいるんだよ！」

男がそう言うと信之介さんはあたしが持つてるトランクケースを見た。

「…………それを持つてきたのか？」

信之介さんがそう言うとあたしは素直に答えた。

「い、依頼人の女人から連絡があつて…………それで、もしかしたら信之介さんがヤバイって思つてそれで…………」

「…………オラの足取りを追つて持つてきたと」

あたしは頷いた。

「…………信之介。その依頼人つてもしかして」

「ああ。間違いないよ風間君。あの女だ」

信之介さんがそう言うと手をあげた。あたしは叩かれると思って目を瞑るが信之介さんはあたしの頭を撫でてくれた。

「信之介さん？」

「…………これはきっと運命だ」

「えつ？」

信之介さんがそう言うとあたしの両肩に手を置いてあたしに話した。

「いいか、奏ちゃん。本来だつたら奏ちゃんを巻き込むつもりはなかつた。だけどころなつてしまつた以上オラも、風間君達も、そして奏ちゃんも、誰も引き返すことはできない。だからよく聞くんだ」

信之介さんはそう言つてあたしの手を掴んでこつそりとビルを見た。そしてその隣には風間という男も一緒だつた。

「いいか、奏ちゃん。あのビルは地獄だ」

「？ 地獄？ どういうことだよ信之介さん？」

あたしはそう聞くと。

「黙つて聞け奏ちゃん」と、言われた。

「の中に1人の少女が捕まつている。今回の依頼はヤクザ、風間組と探偵のオラで彼女を救出する事だ」

この時の信之介さんは、まるで覚悟を決めたような目をしていた。

プシユウウウウウ!!

ある機械から1人の少女が起き上がつた。その少女は病院服のようなものをしており長いピンク色の猫耳のような髪をしていた。その少女が起き上がると。

「目を覚ましたかな？」

誰かが彼女に通信をしてきた。

「…………あなたは…………誰？」

「ワシのことなど気にしなくてよい。さつそく研究を始めるんだ。貴様は地球の全てを学ぶためだけに生まれてきたのだからな」

「…………全てを…………学ぶ。そうだ。それが私の使命でありたつた一つの生きる価値だつたわ」

彼女がそう言うと相手は笑った。

「ハツハツハツハツハツハツハツハツ!!!!その通りだ!!貴様が何者かなど考
える必要はない!!ここは貴様のために作られた施設、いわば楽園だ!!

存分に楽しむがいい!!

男がそう言うと同時に彼女は立ち上がった。

「さあ！用意はいいな？」

「…………問題ないわ」

Hの痛恨

潜入はバレた。風間さん達が囮になつてゐる間あたしと信之介さんは、内部に侵入してゐた。そして今回のターゲットの話を聞いていた。

「？運命の子？」

「そうだ。彼女は地球の全てを背負いこんでしまつたんだ。敵はこの島で彼女の力を引き出し悪事に利用している。その子は機械の部品のように扱われてゐる彼女をなんとしてでも救いたい」

信之介さんがそう言うとあたしは違和感を感じた。

「救いたいって……それが依頼人の頼みじや「優先順位を無理矢理変えただけだ」優先順位？」

あたしは信之介さんの言葉に首を傾げた。

「彼女にとつて少女を救い出すことはついででしかない。本来の目的はここにいる黒幕を殺すことだ」

「？黒幕？」

「全ての黒幕つてわけではない。ただどんなものでも始まりといふものが存在する。あの女を殺したところで真の黒幕に受け継がれるだけだがそれでもかなり敵を弱体化させることが可能だ」

信之介さんは、そう言つて進んでいく。あたしはその後を追つた。そして聞いた。

「……それつてひまわりさんにガイアメモリを渡したやつなのか？」

「そうだ」

信之介さんはそう言うとトランクケースを開けた。

（やつぱり信之介さんなら開けるんだ）

「…………犯人の名前は『フイーネ』。終わりの名を持つ女だ」

「…………それが信之介さんの復讐対象？」

「そうだ」

信之介さんがそう言うとあたしはトランクケースの中身が気になつて聞いた。

「信之介さん。結局その中身って一体……」

信之介さんは少し悩んだ顔をするとあたしの目を見て言つた。

「ガイアメモリだ」

「!!スカルメモリ以外にもあつたのかよ!?なんであたしに隠してたんだよ!!」

「騒ぐな奏ちゃん。言つたら確実に盗むつもりだつただろ?」

信之介さんにそう言わるとあたしは言葉を詰まらせた。

「この際だからはつきり言うぞ奏ちゃん」

信之介さんはそう言つてあたしを見た。

「オラはガイアメモリが大嫌いなんだ。オラの手でこの世にある全てのガイアメモリを破壊してやりたいぐらい嫌いなんだ。こいつのせいでどれだけの人間を苦しませてきたか…………」

この、信之介さんは悲しそうな目をしていた。マサオさんからある程度の話を聞いていたからあの目が誰を映しているのか予想ができる。だからあたしは聞かなかつた。

「…………奏ちゃん。お前はまだ探偵として半人前だ。だからこの場所では何があろうとオラの命令に従え。絶対服従だ」

「絶対服従つて。あたしはいつも信之介さんの指示に従つてるだろ?こんな所でもあたしのやる事はいつもと変わらないだろ?」

あたしが信之介さんにそう言つた時だつた。大きな爆発がおこりビルが少しうれた。

「?信之介さん?」

「こんな所だからこそオラの命令をいつもより聞くんだ。いいか。オラが逃げろつて言つたらオラを見捨ててでも逃げる」

信之介さんがあたしにそう言つた時だつた。大きな爆発がおこりビルが少しうれた。

「急ぐぞ奏ちゃん。風間君の陽動も長く持たない」

ビルの中にある高級そうな部屋。そこには2人の女性がいた。1人は大きな胸を主張するように開いた白いドレスを着た金髪の女性と黒いドレスを着ておりその上から金持ちが着るようなジャンバーを着た黒髪の女性がいた。2人はワイングラスに30年もののワインを注いで飲んでいた。すると。

「侵入者だと？」汎子

「そのようね。お父様」

汎子と呼ばれた女性はお父様と呼ばれる男と通信していた。「何者かは知らぬが運の悪い連中だ。よりによつてお前がいる時に忍び込むとはな。汎子」

男はそう言うと通信を切つた。

「申し訳ないわねフイーネ。せつかく来てもらつたのに」

汎子はそう言うとベルトを巻いた。

「構わないさ。計画が成功すればガイアメモリは大量生産できる。そしてその計画が失敗する事は100%無い。そういうだろう？」

「ええ。その通りよ。なにせここにはあなたから貰つた力とこの私がいるのだから」

汎子がそう言うとガイアメモリを取り出した。

『TABOO』

そしてそれをベルトに入れた。すると汎子の影は化け物のような姿になりフリーはそれを愉快そうな目で見ていた。

「なあ、信之介さん。その…………風間さん達は大丈夫なのかな？」

「風間君達も死ぬ覚悟はできていた。あとは祈るしかない。風間君達の無事を」

あたしと信之介さんはそう言つて進んで行くと。

「なつ」

あたしは見た。恐ろしいものを。

「出て来なさい、コソ泥」

そこには宙に浮いているドーカー・パンツと黒服の男が10人いた。
「それとも産業スパイかしら？ いずれにせようつかり地獄に舞い込んだ愚かな小動物というところね」

「…………なんだよ。あのドーカー・パンツは？」

それを見た信之介さんはあたしの方を見た。

「奏ちゃん。早速命令だ。これを持つてじつとしている。この場を一歩も動くな」

信之介さんはあたしにトランクケースを預けるとゆつくりとドーカー・パンツの前に現れた。それに気づいた黒服の男達はすぐに信之介さんに襲いかかつたけど信之介さんは肘打ちや顎に蹴りを入れた

り投げたりして次々と黒服の男達を撃退した。だけど黒服の男達はすぐに立ち上がる胸ポケットからガイアメモリを取り出した。

「あいつらもガイアメモリを持つてんのかよ？」

『M A S Q U E R A D E』

するとあいつらはみんなドーザントになつた。信之介さんはそれを見ても落ち着いていた。

「コソ泥にしてはやるわね」

すると宙に浮いているドーザントがそう言つた。

「好みのタイプの男よ。でも、残念ね」

ドーザントはそう言つてエネルギーの球を作つた。それを見た

信之介さんは焦りもしていなかつた。

「そのベルト……なるほどお前は組織の幹部か。ということはそれがフイーネが開発した新しい武器か」

信之介さんがそう言つとロストドライバーを取り出した。

「撃つていいのは、撃たれる覚悟がある奴だけだぞ。レディ」

そして信之介さんは、ロストドライバーを巻いた。

「!? 何そのドライバーは!?

(どう言うこと? フイーネ以外にもガイアメモリ専用のベルトを開発することができる人間がいたの?)

信之介さんはスカルメモリを取り出した。

『S K U L L』

「変身」

『S K U L L』

「さあ、お前の罪を……数える」

信之介さんは、仮面ライダースカルに変身すると戦い始めた。あたしはそれを見ていることしかできなかつた。すると、後ろから気配を感じた。あたしは振り返るとそこにはピンク色の髪をした女の子がいた。

「も、もしかしてあの女が? もし、そうだとしたらこれはまぎれもないチャンスだ」

(でもあたしは信之介さんにここを動くなつて言われた)

あたしは信之介さんが戦っている姿を見た。それを見たあたしはこう思つた。

(信之介さんもきつい状態なんだ。ここであいつを助ければ信之介さんもかなり楽になるはずだ)

あたしはそう思つてあいつを追つた。でもそれは死神の罠だった。

「ハアハアハア。追いついた。おい。お前が運命の子か？」

あたしは彼女にそう言つて聞いてみた。そして彼女があたしの方を向くとその目は死んでいた。目に光が宿つてなくてまるで人形のような女だつた。

そしてこれが後のあたしの相棒『マリア』との出会いだつた。

Dの女

スカルとタブードーパントは激しい撃ち合いが行われていた。接近戦をしようとするマスカレイドドーパントに蹴りを入れそのままスカルマグナムでタブードーパントに攻撃をするが飛んでいるタブードーパントはスカルの攻撃を簡単に避けてエネルギーの球をスカルにぶつけた。スカルに当たり吹き飛ばされるが一回転して着地するとそのまま撃つた。

「くっ!!」

タブードーパントはエネルギーの球でスカルの攻撃を撃ち落とすが2発体に当たり後ろにのけぞつた。その間にスカルは壁に隠れた。

「さすが組織の幹部だ。なかなか押し切れない」

スカルはそう言つて大きく息を吐いた。そしてタブードーパントもスカルに対してイライラしていた。

「スカルメモリ。私の攻撃を受けても怯まず戦う姿、間違いないわね。スカルは生死を超えるメモリ。まさに不死身。でも私の全てのエネルギーを一点に圧縮した渾身の攻撃であのドライバーかメモリを破壊すれば・・・・・・・・

タブードーパントは、エネルギーの球を次々と作り出しそしてそのエネルギーの球を一点に圧縮し始めた。それを見たスカルもドライバーからメモリを取り出した。

「勝負だ」

スカルはそう言つてスカルマグナムにセットした。

(な、なんだよこいつ?)

あたしは目の前にいる女が少し・・・・いやかなり気味悪く感じた。まるで生きた人形と話してるようにそんな気持ち悪さをあたしは感じた。

(こんな薄気味悪い女が運命の子?)

あたしはそう思つて いると。

「・・・・誰よ、あなた」

目の前の女があたしにそう言つた。

「こゝの人間じやないわよね?」

あいつはそう言つて部屋に入つた。あたしはそいつについて行つた。

「組織に選ばれるような知能があるようには見えないけど・・・・実験体かしら?」

あいつはそう言つてバカにするような言い方をした。あたしはムツとなつたけど堪えて返した。

「そんな言い方はねえだろ?せつかく助けに来てやつたのによ」

あたしはそう言うとあいつはあたしを見た。

「助ける?・・・・あなたが?」

「見てわかんねーの?信之介さんには劣るけどこのハードボイルドな面構えを!」

「・・・・ハード・・・・ボイルド?」

あいつはあたしの言つたことにも気にせず機会を触りだした。そして映像に映し出されたものを見てあたしは驚いたんだ。そこに映つっていたのは。

「が、ガイアメモリ!!」

あたしは、あの女の隣に行つて近くでその映像を見た。

「まさか。これあんたが作ったのか？」

あたしがそう聞いた時だつた。あの女はいきなりあたしが持つてゐるトランクケースを奪い取つた。

「な、何すんだよ!」

その時だつた。信之介さんにしか開けられないはずのトランクケースを開けた。あたしはそれに驚くと中身を見たこいつも驚いていた。あたしも中身を覗いたけどそれが一体どんな価値があるのかそしてどんな力があるのか分からなかつた。

『SKULL MAXIMUM DRIVE』

「・・・スカルパニッシャー」

スカルはタブードーパントに向けてエネルギー弾を撃つとそれと同時にタブードーパントの圧縮されたエネルギーの球を放つた。しかし先に当たつたのはタブードーパントだつた。タブードーパントは胴体に当たると撃ち落とされるように落ちた。そしてスカルは横に飛んで回避しようとした。だが。

「くっ!!」

一体のマスカレイドドーパントがスカルに抱き着きスカルの行動を止めると圧縮されたエネルギーの球はマスカレイドドーパント

を貫きそしてスカルのロストドライバーに命中した。

大きな爆発音が鳴るなか冴子は立ち上がり息を吐いた。そしてタブーメモリを再びドライバーにセットした。だが。（……再変身できない。ドライバーの制限装置が作動しているのね。私の体力が回復するまで……）

「まつたく恐ろしい男ね」

冴子はそう言つて息を吐くとタブーメモリにキスをした。
「でも……絶対に逃がさない」

「ハア……ハア……ハア……ハア……ハア」

信之介は、壁に手をつけながら歩いていた。被つていたお気に入りの帽子は切れ目が入つておりそれを見て信之介は残念そうな顔をした。

「あいつ俺のお気に入りの帽子に傷をつけやがつて……この札はいつか必ず返してやるよ」

信之介がそう言つてロストドライバーからスカルメモリを外すと。

ピシッ！ピシシッ!!パリン!!

ロストドライバーが腰から床に落ちた。タブードーパントとの戦闘で壊れてしまつた。それを見た信之介は焦りもせずただロストドライバーを見つめそして。

「お疲れさん」

と、ただ一言。それだけを言つた。

「まあいな・・・・・・シユラウドの読み通りになつてきた。このままじやかなり厳しくなりそうだ」

信之介はそう言つて壁に手をつけながら歩き始めた。

「シユラウドが開発したあの新兵器・・・・なんだけ。・・・・確か『ダブルドライバー』・・・・とか言つたか?」

「こ、これは凄い!!誰よ!!一体誰がこんな凄いものを考案したのよ!!」
こいつはそう言つて中にあつたロストドライバーに似たドライバーを取り出した。

「このドライバーの使用者は、私と一体化できる!!同時に2本のメモリが使って更に私の知識を全て備えた究極の超人が生まれる!!」
「・・・・なんだよこの女。こんな女のせいで信之介さんは・・・・。
「・・・・なにが・・・・何がおかしいんだ!!この悪魔!!」

あたしは我慢できずこいつの胸ぐらを掴んで壁に叩きつけた。

「お前の!!お前達が作つたメモリのせいでいつたいどれだけの人人が泣いたと思つてんだよ!!どれだけの人が悲しんでるのか分かつてるのかよ!!」

あたしは睨みつけながらそう言つた。だけど。

「……拳銃を作つてゐる工場の人間は犯罪者かしら？」

この女はあたしにそう言つた。そしてその言葉にあたしは言葉を詰まらせた。

「違うでしょ？使つて悪事をする人間の方が悪いのよ。私はただガイアメモリを生産してより効果の強いメモリを見たいだけなのよ」

「だ、黙れ!!」

あたしは思わずこの女を床に投げた。だけど私は後悔していくな。こんな女が哀れな囚われの子？ふざけんな。こんな女、助ける価値なんかない。こんな奴殺した方がいいに決まつてる。

「邪魔をしないでくれないかしら？」

あの女が立ち上ると私は思わず握り拳を作つた。

「さつきも言つたけど、どうせあなたもガイアメモリの実験体でしょ？あなたにぴつたりのメモリなら後で私が選んであげるから邪魔だけは……」「この悪女が!!」!!

あたしはこの女の顔面を思いつきり殴つてやつた。すると女は変な機械に入るとその場から消えた。

「えつ？」

比喩とかじやない。本当にその場から消えた。あたしは急いでドライバーを直して信之介さんのところに戻ると途中で信之介さんが壁にもたれかかるように座つていた。

「！信之介さん!!

「…………奏ちゃん。…………お前…………どこに消えてた
？」

この時、あたしは信之介さんの顔がすぐ怖か感じた。

私は・・・・私の名前は覚えている。だけどそれ以外のことは何も覚えていない。思い出そうとしても砂嵐が発生して何も分からなくなる。私の名前以外に覚えていることは私の存在価値だけ。だけど私にはどうでもいいこと。

「ガイアタワーに転送されちゃったわね」

私はそんなことすらもどうでもよかつた。でも今の私には気になつて仕方のないことがあつた。

「あの実験体の女が言つていた、不可思議な言葉・・・・興味深い」

さあ、検索を始めましょう。

「キーワードは、『ハードボイルド』」

「このバカが!!
パン!!

あたしは赤くなつた左頬を抑えた。

「なんで言われた通りにしなかつた!!あの子を押さえれば今頃……！」

信之介さんはトランクケースを持つと歩き始めた。あたしは納得できなかつた。

「…………信之介さん。なんであんな女を助けるんだよ」

「！」

「あんな悪魔みたいな女。信之介さんが命を張つて助ける価値なんかないよ。あいつは信之介さんの妹のひまわりさんを殺した元凶の1人なんだぞ!!あたしは嫌だ!!あんな奴助けたくねえ!!助けたくねえよ!!」

あたしは泣きながら信之介さんに言つた。

「…………奏ちゃん。いや、奏。命を張る価値ならある。彼女だつて望んでこんなことをしてゐわけじゃない」

あたしは泣きながら信之介さんを見た。

「彼女だつて本当なら母の胸に抱かれそして家族と幸福に育つていたはずだ。だけど彼女は家族と引き離された。奏、お前が不幸にも本当の親御さん達と死に別れたように…………」

信之介さんはそう言つてあたしを見た。

「だから奏。オラができなかつたことをお前がやるんだ。彼女を助けてやれ、奏」

「…………ても」

「彼女が悪魔に見えるなら、悪いのは彼女じやない。そう書き換えた奴らとフイーネだ。彼女自体は真っ白な紙と同じだ」

信之介さんはそう言つてあたしの肩に手を置いた。

「奏。あの子に手を差し伸べてやれ。お前は弱い者に力を振りかざさず手を差し伸べるんだ。きっと彼女にもできる」

信之介さんはそう言つてあたしの手を掴んで立たせてくれた。

「彼女は、このビルの中枢部に融合してゐるはずだ。まだ間に合う急ごう」

信之介さんは私にそう言つてくれた。なんであたしは忘れてた

のかもしれない。あの時もそうだ。あたしは、信之介さんに救われて
いたんだ。それを今度はあたしがあいつにする番なんだ。あたしは
急いで信之介さんを追いかけた。

B 始まりの夜

黒服の男達の妨害を撃退しながらあたしと信之介さんは、あの女のもとに向かっていた。そしてあの女は妙な機械の中にいた。あたしと信之介さんはゆつくりと近づくと、「帰つてくれないかしら？」

と、言つた。

「私の読書の邪魔をしないでちょうどいい」
「？ 読書何言つてるんだよこいつ？」

あたしは首を傾げた。

「彼女は今、地球（ほし）の本棚に入つた。」「本棚って・・・・・・・・・・信之介さんどういうとなんですか？」
「彼女は、この地球の記憶そのものと頭脳が直結してしまつたんだ。脳内に地球が抱える全ての知識が『本』という形になつて現れてそれを自在に検索することができる。・・・・・・・・・・らしい」
・・・・・・・・・・ちょっと待てよ。あたしこの話聞いたことがあるような気がする。そんなのまるで。

「が、ガイアメモリみたいだ」

「そうだ。地球の記憶を悪用し人間を怪物に変える装置として生まれたのがガイアメモリ。彼女はそれの生産のためだけに利用されてい

るんだ」

「こういうことだつたんだ。あいつが運命の子つて呼ばれてる理由はそう言うことだつたんだ。

「因みに、地球の記憶の力はノイズの位相差障壁を無効化することができる」

「えつ？」

「奏ちゃんを助けた時もスカルの力で助けただろ？あの時もガイアメモリがノイズを倒したんじやなくて地球の記憶の力が宿つたガイアメモリだからこそノイズを倒せたんだ。まあ、その理由もなんでか分かつてないけどな」

信之介さんはそう言つてスカルメモリを取り出した。

（彼女を装置から引き出すことはもう不可能。だけどもし彼女が自分の意思で出るならまだ可能性は残されている。スカルメモリに残されたエネルギーで彼女の世界に接触できれば……）

「……………いけるか？」

信之介さんはそう言うと、

「奏ちゃん。入口のあたりを見張つてくれ」

あたしにそう命令してきた。

「えつ？ 信之介さん。一体何を？」

「二度も言わすな」

「……………わかつた」

あたしはそう言つて入口に向かつた。

「……………どういうことなの？」

私は混乱していた。こんなことは初めてだつたから。

「分からぬ。不可解だわ。調べれば調べるほど……………あの女

が『ハードボイルド』なる人物像には程遠い……

私が読書に集中していた時だつた。

『SKULL』

「?」

私の世界に大きなエネルギーが駆け巡つた。そして私の前にあの男が現れた。

信之介は、スカルの力で地球の本棚に入ると完全に壊れたスカルメモリを見た。

「…………スカルメモリ。オラはお前の力をずっと憎んでいた。…………だけど最後に…………礼を言うぜ。ありがとう。スカル」

信之介がそう言うとスカルメモリは消滅してしまつた。

信之介は彼女のもとに向かうと。

「…………あの特殊なメモリの力ね。まさかこんな強引な方法で私の本棚に入つてくるなんて……」

彼女も少し驚いていた。

「さあ、行こうか」

信之介は、そう言うが彼女は首を振つた。

「私は…………ここにいろいろって言われた。『恐怖』と言う名の男に」

彼女がそう言うと少し震えていた。信之介ゆっくり歩み寄りそして彼女の隣に座つた。

「なあ、お前は今まで一つでも自分で決めて何かをしたことがあるの

か?」

「自分で決める?」

彼女は少し考えたがすぐに首を横に振った。

「分からぬ。私は……何も覚えてないの」

「…………そうか。じゃあ今日が最初だ」

信之介はそう言つて立ち上がつた。

「自分自身の決断でこの暗闇の牢獄を出るんだ。そして自由になつたら…………お前の罪を数えろ」

「…………私の…………罪?」

『お前の!!お前達が作つたメモリのせいでいつたいどれだけの人が泣いたと思つてんだよ!!どれだけの人が悲しんでるのか分かつてののかよ!!』

「なんで、なんであの女の言つたことが頭に響くの?」

彼女は自分の頭を抑えた。

「…………名前はなんだ?」

「…………マリア。私の名前はマリア。でも、それ以外のことは何も思い出せない」

「…………どうか。マリア、オラは『アクション仮面』って言うヒーローが大好きなんだ」

「?」

「昔流行つた特撮アニメでオラみたいな偽物のヒーローじゃなくて彼は本物のヒーローだつた。彼は…………自分の決断で全てを解決していたんだ」

「…………決断…………」

その時だつた。彼女の目に…………マリアの目に光が宿つた。
「人形のような目だつたけど…………女になつたな…………」

パリイイイン!!

何かが割れる音が聞こえた。あたしはそつちを見るとそこにはあの女に肩を貸している信之介さんがいた。

「信之介さん!!」

私は肩を借りてなんとか歩いていた。

「…………問題はこれからよ。はつきり言うわ。この島から逃亡するの是不可能に近いわよ?」

「なんとかするさ。オラの助手もいる」

私は顔を上げて彼女を見た。

「…………彼女はあまりに不完全すぎるわ」

「確かに奏ちゃんは、半人前だ。だけど奏ちゃんはマリアちゃんが持つてないものを持つてる。オラの大切な愛娘だ。仲良くしろよ」
「…………この男が私にそう言うと彼女は私の腰を持つてそして。「変わります。信之介さん」と言つて私に肩を貸してくれた。
「…………あたしはやっぱりお前が大嫌いだ。これからもあたしとお前とは合わないと思う」
「…………」

「でも、お前の事情を知らないくせに一方的に言つたことは謝る。ごめん」

「…………」

「あたしは、天羽 奏。名探偵、野原 信之介の娘で助手で一番弟子だ。お前は？」

「…………マリア。それ以外は覚えていないわ」

「そうか」

（どうするか。もうスカルに変身することはできない。脱出するにはこのトランクケースにあるダブルドライバーをたよるしか道がない。だけどこいつを使うつてことはマリアちゃんを戦いに利用することになる。それだとオラのやる事はフイーネ達と同じじゃないのか？）

信之介はトランクケースを奏に渡した瞬間だった。

ドンッ!!ドンッ!!ドンッ!!

「!!!
えつ？」

信之介は撃たれた。

「信之介……さん？」

あたしは信じられなかつた。突然、信之介さんが倒れた。なんで信之介さんは背中から血を流しているんだ？なんで床に血の水たまりができてるんだよ？

「し、信之介さん!!信之介さん!!!」

あたしは急いで信之介さんの隣に行つた。

「…………ガツ！い、一瞬判断が鈍つた…………オラ
も探偵としてまだまだ甘かつたか」

「信之介さん!!喋つたらダメだ。すぐに手当てすればなんとか「奏ちゃん」!?」

「この依頼…………お前が引き継いでくれ」

信之介さんはそう言つてあたしに信之介さんのお気に入りの帽子を被せてくれた。

「奏…………あの子を…………マリアを頼んだぞ」「な、何、冗談言つてるんだよ信之介さん!!あたしにはまだ帽子は早いんだろ!?そんな遺言みたいな事言わないでよ!!信之介さん!!」「…………似合う女になれ…………か…………な…………」

で

…………うそだ。

「し、信之介さん?」

うそだうそだ。

「あ、ああ」

私の前であの子が泣いてる。私の前であの男が死んだ？私の
罪・・・・・・・・・私の？
そうか。これがそうなんだ。人を泣かせると言うのはこう言う
事だつたんだ。
これが・・・・・私の罪だ!!

あの男はビルの下に落ちた。私と彼女は・・・・・・奏はただ見てることしかできなかつた。

「ふふふつ。死んだのね、スカルの男。安心したわ」

「タブートーパント!!」

『残るはネズミ一匹!!』

を掴んで逃げようとした。だけど。

「なつ!!」

私たちの前にカラフルな化け物が現れた。こいつらは。

「!!ノイズ!!こんな時に!!」

「あれは!!くつ!!フィーネの仕業ね」

「くそつ!!こつちだマリア!!」

今度は奏が私の手を引いてくれた。だけど私達はノイズに包囲されていた。宙にはタブートーパント、周りにはノイズ。最悪の状況だつた。

「…………あたしの…………あたしのせ이다。あたしが最初に信之介さんとの約束を守つていればこんな事には」

奏が泣いてる中私はトランクケースを持ち直して開いた。それに気づいた奏は私を見た。

「…………ねえ、奏。あなたはさつき私を『悪魔』つてののしつたわよね?」

「…………こんな時になんだよ?ノイズに囲まれてるしどーパントまでいるし…………そうだよ。お前さえ…………お前さえいなければ信之介さんは死ななかつた!!」

「奇遇ね。私もあなたがあの男の言うことを聞いていればあの男は死ななかつたと思つてるわ」

私がそう言うと奏は、歯ぎしりをした。私にそんなこと言えるのだからまだ闘志は残つてるようね。

「殴り合いでも口喧嘩でも後でいくらでも付き合つてあげるわ。でも今は生き延びなきやいけないでしょ?」

「ぐつ」

「そこであなたに提案があるわ」

「提案?」

「あなたは悪魔と相乗りする勇気、あるかしら?」

私はそう言つてガイアメモリとドライバーを見せた。奏がガイアメモリを取ると私もガイアメモリを取つた。そしてドライバーを奏の腰につけた。

「いくわよ奏!!」

「うつ…………うあああああああああああああ!!」

『CYCLONE』／『JOKER』

私と奏は、一つになった。

第1章 ルナアタツク

A 入学／E 出会い

私は立花 韶15歳！誕生日は9月の13日で血液型はO型。身長は157センチ体重はもう少し仲良くなつたら教えてあげる！趣味は人助けで好きなものはごはん&a m p;ごはん。あとは彼氏いない歴は年齢と同じ!!

この春、私は晴れて女子高生となる。私の通う学校の名前は『私立リディアン音楽院』。ここには憧れのあの風鳴翼さんが通つている。できることなら何かの偶然で出会えないかと思つて受験勉強も頑張つた。・・・・でも。

「立花さん！」

「っ！」

目の前の先生の叫び声に私はビクリと肩を震わせる。

「あ、あのお・・・・木に登つたまま降りられなくなつた子猫がいましてですね？」

「それで？」

「きつとお腹を空かせてるんじゃないかな」と

「立花さん!!!」

「たはあ～疲れたあ～!!」

入学初日の授業を終えて寮の部屋に帰つてきた私は床に倒れこむ。「入学初日からクライマックスが百連発気分だよ～・・・私呪われてる～」

「半分は響のドジだけど残りはお節介でしょ？全く、アニメじゃないんだから」

「人助けと言つてよ～、人助けは私の趣味なんだから」

愚痴る私に言う同室の板場 弓美ちゃんに私は唇を尖らせて言

う。

「朝の事はともかく流石に同じクラスの子に教科書を貸さないでしょ
普通」

「うつ・・・それは・・・その・・・、隣の子に見せて貰おうかなあと
「それこそ、響が貸さずにその子が隣の子に見せて貰えれば良かつたで
しょ」

「あつ、確かに。弓美ちゃん頭いいね！」

「いやいや、響が目の前のことしか見てないだけでしょ？まあ、それも
響の良いところなんだろうけどね。前を見るって事は、その先にある
手を差しのばさなければならぬ人を見つけられるって事だしね」

「弓美ちゃん」

私は弓美ちゃんの言葉に感動していると。

「あ、そう言えば『人助け』と言えばね？」

私はふと今朝の一件を思い出す。

「今日木に登つて降りられなくなつた子猫がいたんだけどね」

「今朝先生に怒られてたやつね」

「うつ・・・・・・・それはまあそんなんだけどね」

弓美ちゃんの言葉に私は朝の先生の剣幕を思い出して顔を躊躇める。

「まあとにかくその時にね、実は猫と私を助けてくれた人がいてね」

「助けてくれた人？誰？先生？用務員さん？」

「ううん、全く知らない人」

弓美ちゃんの問いに私は首を振りながら答える。

「子猫が思つたより高いところに登つててね、猫を抱っこしたままだとなかなか降りられなくてほどほど困り果ててた時に枝が折れちゃつたんだよ」

「折れたつて・・・・・落ちたの!?えつ!?ケガとかしなかつた!？」

「だから助けてくれたの！その場にたまたま通りかかったその人が落
ちた私をキヤツチしてくれたの!!しかもお姫様抱っこで!!その後に
「大丈夫かレディ?」って言つてくれてすぐカツコよかつたんだよ
!!そしてその猫もちゃんと飼い主の人に返してくれたんだよ」

「へえ、そんなことがあつたんだ。・・・なんて言うかすつづくギ

「ザな人ね」

「そうかもね」

「それで？どんな人だつたの？」

「うんとね、歳は聞かなかつたけど、たぶんそんなに離れてないと思う。20代前半くらいの人だつたよ」

「へえ？思つたより若いんだね。もつとおじさんを想像してたよ」

「え？」

「ん？」

「私を助けてくれた人男の人じやないよ？」

「えつ？ そななの!? つていうか 20代前半の女性が「大丈夫かれディ」つて痛すぎでしょ!?」

「でもカツコよかたなう。また会えないかなう」

「アニメじやないんだからそう簡単に会えないでしょ。名前とか聞いてないの？」

「それは聞いたよ」

弓美ちゃんの問ひに私は領く。

「えつとね・・・・奏さん。たしか『ハードボイルド探偵』の天羽奏つて名前だつたと思う」

とある村。真夜中ともいえる時間に飛び交う複数のヘリからの光に照らし出された場所に奴らはいた。

『ノイズ』

人類共通の脅威とされ、人類を脅かす認定特異災害。13年前の国連総会で特異災害として認定された未知の存在であり、発生そのものは有史以来から確認されていた。歴史上に記された異形の類は大半がノイズ由来のものと言われ、学校の教科書にもその存在が記されているなど、知名度 자체はそれなりに高い。空間からにじみ出るようになど、突如発生し、人間のみを大群で襲撃、触れた人間を自分もろとも炭素の塊に転換させ、発生から一定時間が経過すると自ら炭素化して自壊する特性を持つ。また、一定範囲以内に人間がいなければ、周囲を探索したりはせず自壊するまであまり動くことはない。

現在のあらゆる兵器ではノイズに対処することができない。そのため、ノイズが発生したことが確認されればすぐさま避難誘導が行われる。この村でも付近一帯の民家には避難指示並びに自衛隊や特異災害対策機動部による避難誘導も行われた。

現在も少しでもノイズの被害を減らそうと対策組織による迎撃が行われているがそれらは一切の成果を上げていない。そんな中最近ではありえない光景を彼らは目撃していた。そしてその光景は2年前から目撃させていた。

「おりやあ!!」

彼らの前には1人の少女がいた。その少女は変わった姿をしていた。まず服はピッヂリとした鎧のようなライダースーツを着ておりそのライダースーツは右半分が『緑』、左半分が『黒』という変わったデザインをしていた。

顔はとても美人だが髪はライダースーツと同じように右半分が『緑』、左半分が『黒』という変な髪色をしておりそして『黒』の髪の部分にはWの形をした髪飾りがついていた。

そんな女の子が目の前にいるノイズの群れを躊躇していたのだ。どういうトリックを使っているのかは分からないが通常兵器や通常攻撃が通用しないノイズに女の子はパンチや蹴りを当ててどんどんノイズを倒していた。すると。

「I myutesus amenohabakiri tron」

どこからともなく済んだ歌声が聞こえる。それと同時にノイズの中でも一番大きな二足歩行して進んでいたものの前にへりから何かが落ちる。それは光を放ちながら地面へと降りていく。

「へつ！ ようやくお出ましか」

女の子がそう言つて襲つて来たノイズに後ろ回し蹴りをして倒すと女の子の前にはノイズを片つ端から斬つて行く女の子が現れた。そして残りは二足歩行型の大型ノイズだけになつた。

「さあてお片づけの時間だ」

女の子がそう言つてベルトからUSBメモリのようなものを取り出すとそれを右腰にセットした。

『JOKER MAXIMUM DRIVE』

すると女の子の周りにサイクロンのような風が吹くと女の子は宙に浮かんだ。そしてもう1人の女の子も後に続くよう大きくジャンプすると武器である刀を巨大化させた。

『ジョーカーエクストリーム!!』

女の子がそう言うといきなり体が真っ二つに割れると黒の方からは先ほどの女の子の影が浮かび上がりもう一つの体からは別の女の子の影が浮かび上がつた。そして二つの飛び蹴りと別の女の子の斬撃がノイズを襲つた。

ノイズは大きな爆発を起こした。その中で女の子は元の形に戻ると立ち上がり女の子の方を見た。女の子もまるで親の仇を見るような目で睨み付けると刀を構えた。

「今日こそ特異災害対策機動部2課まで同行していただきたいが私の本音を言うと同行しないでほしい。その方がお前を倒す口実が生まれるからだ。ダブル!!」

女の子がそう言ふとダブルと呼ばれた女の子はため息をついて構えた。

「いいぜ。『あたし』が何度も相手になつてやる。かかるて来い風鳴翼!!」

ダブルがそう言つた時だつた。

『間違つてるわよ。そこは『あたし』じゃなくて『あたし達が』でしょ

?』

と、別の女の子の声が響いた。そしてダブルは「そうだな」つて
言つて笑うと2人の女の子が同時に走り出した。

M メモリ／A 覚醒

『自衛隊、特異災害対策機動部による避難誘導は完了しており、被害は最小限に抑えられた』だつて

入学式の翌日、学園の食堂で昼食を取つていた響はリディアンでできた友達の弓美が携帯端末を見ながら言う。昨夜起こつたニュースを聞いていた。話を聞く最中も響は箸を止めず食べ続けていた。

「ここからそう離れていないね」

「うん」

口に含んだご飯を咀嚼しながら弓美の言葉に頷く。すると。

「ねえここいいかな？」

と、響達に話しかける2人の女の子が現れた。

「え？ 別にいいけど」

響は再び箸を動かしておりそれを見た弓美は響の代わりに答えた。2人の女の子が弓美と響の隣に座ると。

「いやー、めんね？ 座る席がほとんどなくて困つてたのよ」

そう言つて身長の高い女の子が弓美にそう言つた。

「別にいいわよ。ここは私と響しか使つてないし」

弓美がそう言つと響の隣に座つている金髪の女の子が響に話しかけた。

「たくさん食べるんですね」

「うん。だつてお腹空いてるんだもん」

響がそう言つと金髪の女の子はクスクスと笑つた。

「私は寺島 詩織と言います。あなたは？」

詩織という女の子が響にそう聞くと響は口に入れたものを飲み込んでから自己紹介した。

「私は立花 韶15歳！誕生日は9月13日で血液型はO型。趣味は人助けで好きなものはごはん&ごはん。あとは彼氏いない歴は年齢と同じだよ」

「なんかえらく独特な自己紹介ね」

身長の高い女の子がそう言つと。

「でも面白い子でしょ？あ、私は板場 弓美。趣味はアニメ鑑賞よ」「私は、安藤 創世。趣味、特技はバスケで部活もバスケ部に入るつもりよ」

4人は自己紹介をしていると。

「ねえ、『風鳴翼』よ！」

「芸能人オーラ出まくりで近寄りがたくない？」

「孤高の歌姫と言つたところね！」

と、ヒソヒソとした声が届く。

「つ！」

その会話の中に出て名前に咄嗟にその人物を探そうと立ち上がつ

た響は

「つ！」

自身の隣を歩く人物にぶつかりそうになつた。その人物は今まで噂されていた『風鳴翼』だつた。風鳴翼、日本を代表するアーティストであり、ツインボーカルユニット『ツヴァイウイング』の一人でもあつた人物。『二年前のある事件』以降はソロでの活動を行い、絶大な人気を誇つている。

超有名トップアーティストであるその人が突如目の前に現れただで響の思考は真っ白になつた。

「あ、ああ・・・あの・・・・・」

響は、ずっと出会つたときに言おうとしていた言葉が緊張で出てこずお茶碗と箸を持つたまま立ち上がりつておりカチヤカチヤと音を立ててている。

しかし翼は、無表情で響を見つめていると人差し指で自分の口元を指差した。

「へ？」

その動作に響はつられて自分の口元に手を当てる。すると、その指先に何かの感触を感じる。見るとそれは、先ほど自分がかき込んでいたご飯粒だった。

公園のベンチ。そこでは黒いスースを着たオレンジ色の髪の女の子がだるそうな顔で座つており黒い帽子をウチワのように仰いでいた。

「あーだるい。いつもいつもペット探しばかりじゃあたしだってモチベーション上がらねーよ。なんかこうもつとハードボイルドに解決するような事件があたしの依頼に来ねーかなあ？」

女の子はそう言つて両隣にあるペットケースを見た。そこに中には2匹の黒猫が入つていた。女の子は背伸びをして首の骨を鳴らすとペットケースを持ち上げると2匹の黒猫の飼い主である依頼人の家に向かつた。

「はあ・・・翼さんに完璧変な子だつて思われた」

響はへこむように寮のテーブルにうなだれた。

「間違つてないからいいんじやない？」

「そんなあ～」

そう言つて弓美はポテチを食べながらアニメを見ていた。そして弓美は思い出すように響に聞いた。

「そりいえば今日は翼さんのCD発売だつたわよね？大丈夫なの？」

「ん～？・・・・・・・・ハツ!!忘れてた!!」

弓美にそう言われて思い出したようにガバッと顔を上げた響は大慌てで立ち上がり準備をすると弓美に「行ってきます」と言って全力で走り最寄りのモノレールに向かった。

「フツ！フツ！CD!!フツ！フツ！特典!!フツ！フツ！CD!!フツ！
フツ！特典!!」

期待に胸を膨らませひた走る響。その顔には先ほどまで憧れの人間に変人認定されたと落ち込んでいた人物とは思えない幸福感に満ちた顔で走っていた。

「フツ！フツ！CD!!フツ！フツ！特てつてうわあ!!」

「うおつ!!」

横の道から出て来た人物にぶつかり響は尻もちをついた。

「いてて・・・・・すいません」

響は謝つて行こうとしたが。

「待てやゴラア!!」

いかにもチンピラですつていう雰囲気を纏つたおつさんが響の

肩を掴んだ。

「な、なんですか!? 私急いでるんですけど・・・」

「テメエどこに目えつけてんだゴラアー・見ろよ肩の骨折れちまつた
じやねーか!! 慰謝料と治療費払えやゴラア!!」

頭の悪い会話をするおつさんに絡まれた響は急いで風鳴 翼
のCDを買いに行きたいのに買いに行かないという状況になり無意
識に握り拳を作っていた。すると。

「おいおい。なにいい年したおつさんが女子高生脅してんだよ?」

と、声が聞こえた。おつさんと響は、声が聞こえた方を見るとそこ
には黒いスースと黒い帽子を被つたオレンジ色の髪をした女性がい
た。そしてその女性を見た響は1発で気づいた。

「昨日の」

「テメエ誰だゴラア!! 部外者は黙つてろや!!」

おつさんはそう言つて威嚇するが。

「そもそもいかねえな。あたしがこの街にいる以上悪党を見逃す理由な
んてない」

女性がそう言うとさらに言う。

「まだ夕方なのにそんな風になるまで酒飲みやがつて・・・・程々に
したかねえと警察に捕まるぞ?」

と、言つた。

「女風情が俺に指図するんじやねーよ!!」

おつさんは酒の勢いと頭に血が上つている状態なのかキレイやす
く女性の言葉にキレて殴りかかつた。しかし女性は頭を少しそらす
だけでおつさんのパンチをかわした。

「なつ!! テメエよけんな!!」

おつさんはそう言つて殴りかかるが女性は退屈そうな顔でさら
にアクビをするとおつさんはさらに怒り顔が真っ赤になつていた。
しかしどれだけ殴りかかつても女性は簡単に避けてしまうので結果
的に1発も当たらなかつた。それどころか周りにギャラリーが集ま
りおつさんに「1発ぐらい当ててみろや」とか「女相手に情けないわ
よ」とかおつさんをバカにするような声があつた。そして女性は少し

調子にのつてゐるのか被つていた帽子を脱ぎ放り投げると同時におつさんのがパンチを避けると放り投げた帽子をキヤツチしてカツコよく被りそして

「どうした、その程度か？ピエロ」

そう言つて決めポーズをとつた。それを見たギャラリーは女性に声援が送られた。「痛いけどカツコいいぞ」や「素敵抱いて」とかちよつとふざけた声援も混ざつてゐるが全員女性を賞賛していた。それを見たおつさんは舌打ちをすると。

「お、覚えてやがれ!!」

と、捨てゼリフを吐いて逃げていつた。

「大丈夫か？ケガは？」

「あ、はい！大丈夫です！」

ギャラリーが解散すると女性は響に近づいて響の安否を確認する
と響は大丈夫ですと笑顔で答えた。

「助けてくれてありがとうございます、奏さん!!」

「いいつていいつて……うん？なんであたしの名前知ってるんだ
？レディ」

「昨日木から落ちたところを助けてくれました！」

響がそう言うと奏という女性は思い出したように手を叩いた。

「あ、昨日のレディか。こんな所でなにしてるんだ」

奏が響にそう聞くと。

「欲しいCDを買おうと思つて急いで來たんですけど……」

響がそう言うと時間的にもう間に合わないと思い少し落ち込み始めていた。

「CDつて、もしかして今日発売の風鳴翼のCDか？」

「つーもしかして奏さんも翼さんのファンなんですか!?」

興奮して聞く響に奏は苦笑いを浮かべながら答えた。

「いや、あたしはファンじゃないよ。ただここら辺で仕事をしてて今はその帰りさ」

奏がそう言うと奏は止めていた黒と緑のバイクに乗った。

「うわー変わったバイク」

響がそう言うと。

「…………もう遅いと思うけど行つてみるか? CDショッピング。
あたしが送つてくれレディ」

奏は、カツコよくそう言うと。

「本当ですか!? ありがとうございます!! 後、私は立花 韶って言います!!」

「響か。じゃーあたしも改めて、あたしは天羽 奏。どんな難事件もハードボイルドに解決する探偵さ」

「新作CD♪」

響は、奏のバイクに乗せてもらいCDショッピングに向かつていた。もしかしたら売り切れてるかもしれないから響は奏の背中に抱きつきながらションボリしていたすると突然奏はバイクを止めた。

「うわっ！・・・・・・奏さん？」

「奴らだ」

奏がそう言うと響も気づいた。すぐ隣のコンビニに目を向ければ、そこには人の姿はおらず、ひしやげた商品棚や潰れた商品とともに真っ黒な炭素の山ができている。

コンビニの他にも周辺には人の気配はなく、目の前には人の形を作る炭素の山たち。風に乗つて炭素が目の前を舞う。さつきまで命だつたものが辺り一面に転がる惨状に絶句した響はぽつりとつぶやく様に

「ノイズ！」

その惨状の原因となつた存在の名前を口にする。

「・・・・・・響。新作CDは諦めろ。まずはここから離れるぞ」

奏がそう言つた時だつた。

「いやああああああああ！」

悲鳴が聞こえた。

「まだ人がいたのか!?」

奏がそう言うと響がバイクから降りて悲鳴が聞こえた方向に走り出した。

「おい、響!! つたくなにやつてるんだよ!!」

奏もバイクから降りるとすぐに響の後を追つた。

奏は親とはぐれた女の子をオブリながら響と一緒に走っていた。

「クソどんどんシエルターから離れて行きやがる」

奏はそう言つてノイズから逃げていた。すると。

「奏さん!! 前!!」

奏は前を見ると前からもノイズがゆっくりと歩いていた。それを見た奏は響の手を掴むと川に飛び込んだ。

「フハツ!!」

「響!! こつちだ!!」

奏は泳いで向かい側にある工場に向かつた。そこからノイズから逃げようとするが目の前に大量のノイズが現れた。

「こゝにも!!」

響がそう言うと。

「お姉ちゃん。私たち死んじやうの?」

女の子は不安そうな顔でそう言うとそれを聞いた奏はゆっくりと女の子を降ろすと響の手を握らせた。

「大丈夫だ。ハードボイルドな探偵のお姉さんにまかせろ」

奏がそう言うと。

「響。そしてお嬢ちゃん。2人とも今から見るのは絶対に内緒にしていてくれよ?」

奏がそう言うと胸ポケットから何かを取り出した。そしてそれを腰に装着するとベルトの形になつた。

「行くぜ相棒」

奏がそう言つてUSBメモリのようなものを取り出した。

『JOKER』

そして奏の頭の中である音声が響いた。

『CYCLONE』

と。

「変身」

奏がそう言つた瞬間だつた。右側に突然緑のUSBメモリが出 現しそれを指し込むと今度は左側に黒のUSBメモリをセットして

してWのかたちで開いた。

『CYCLONE』／『JOKER』

すると奏の周りに疾風のような風が吹き荒れると奏は姿を変えた。

「か、奏さん？」

響の前にはオレンジ色の髪から黒と緑の髪に変わりそして服も半分黒、半分緑の鎧のようなライダースーツに変わったのだ。

『ノイズ共。さあ、お前達の罪を数えろ』

奏がそう言つた時だつた。

『Ballwisyball nescelle gungnir tro n』

歌が聞こえた。そして奏は後ろを見るとそこには『風鳴翼』と、よく似たものを纏つた響がいた。

S 特異災害機動部二課／D 探偵事務所

とある施設。そこではノイズの出現の反応をキヤツチしその位置の特定を急いでいた。

「反応、絞り込めました！位置特定！」

複数の人員が端末を操作しておりその中の一人が自身の向かう画面に出た情報を正面の大きなディスプレイに表示した。

「つ！ノイズとは異なる高出量エネルギーを検知！」

「波形を照合！急いで！」

その声に長い茶髪を頭の上でまとめた白衣の女性が指示し、その結果が表示される自身の端末の画面に息を飲む。

「まさかこれって！アウフヴァッヘン波形！」

女性の言葉とともに正面の巨大なディスプレイに文字が浮かぶ。

【Code : GUNGNIR】

「『ガングニール』だと!!」

それを見たその場の人間全員が驚愕した。中でも中心に立つ大柄な男が驚愕の声を上げた。そしてその表示に一番の動搖していたのはこの広い部屋の一番後ろ、出入り口付近に立っていた少女、風鳴翼は驚きと困惑に呆然と画面に浮かぶ文字を睨みつける。

「新たな・・・適合者？」

白衣の女性の隣で端末をいじっている研究員の言葉とともに画面にはどこかの監視カメラから送られているらしい映像へと切り替わる。

工業地帯の建物が囲まれた場所。そこにはノイズに囲まれる中心でぴったりとしたボディースーツと機械的な籠手とブーツ、頭には一対の尖った角のようなヘッドギアを身に着けた翼とそう年の変わらない少女とそれを呆然と見つめる幼い少女の姿。そして。

「ダブル！彼女もあの場にいるのか!?」

「つ！」

驚愕する男性の言葉にさらに表情を険しくした翼は身を翻し出入口へ走った。

「待て翼！」

男性が慌てて叫ぶが制止する声も聞かずに翼は部屋を後にする。
「くつ！今すぐ人員をそこに向かわせる！翼だけで行かせるな！」

「響、お前なんで？」

奏は目の前の光景に驚愕していた。だが1番驚いているのは響本人だった。突然胸の中で歌が思い浮かびその通りに歌つたたらまさか自分も変身しできるとは思つてもいなかつたのだ。

「お姉ちゃんカッコいい!!」

女の子は響にそう言うと。

「危ない！」

ノイズが奏なら襲いかかつた。しかし奏は分かつていたのか右の肘打ちをノイズにくらわせるとノイズを一瞬で倒した。すると。

『あれは、風鳴 翼が纏っているものと同じものね。実際に興味深いわ』

「…………えっ？」

奏から『奏とは別の声』が聞こえた。

（どういうこと？今の奏さんの声じやなかつたような……？）

響がそう思つているとノイズはどんどん飛んできて奏は襲つてきたノイズを片つ端から撃退していた。

「響!!お前はその子を守るんだ!!」

「えっ!?あ、はい!!」

奏の言葉に響が頷く。奏はパンチや蹴りをしてなんとか防いでいるが数の暴力で襲つてきているノイズに苦戦していた。すると。

『こういう時は』

奏はベルトを閉じて緑のメモリを取り出した。しかしおかしな事にそれを見た奏は驚いた顔をしていた。

『LUNA』

そして黄色のメモリを出すとそれをセットして再び開いた。

『LUNA』／『JOKER』

すると、奏の右半身が緑から黄色に変わった。

「ウエッ!? 色が変わった!」

そして更に奏は右腕をまるでゴム人間にように伸ばしそしてその右腕をムチのようにしならせるノイズをどんどん倒していく。『マリア!! お前勝手にメモリ変えるなよ!!』

と、奏が大声でそう言つた時だつた。響の背後からノイズが襲いかかつた。

「しまつた!! 逃げろ響!!」

「つ！」

奏は間に合わない。そう思つた瞬間だつた。

「ハイツ!!」

響はなんとノイズに合わせるようにチョップをしてノイズを倒したのだ。

『えつ?』

奏はこれを見て目を見開いた。そして響の視線の先には女の子に襲い掛かるうとするノイズが見えその中の一匹、青いカエルのようなノイズが女の子に飛び掛かる。

「させない!!」

響は一気に走り抜くとかかとを大きくあげてそしてそのノイズにかかると落としくらわせた。そして更に人型のノイズが来るが響は1体に下段蹴りをしもう1体には正拳突きをした。

『ハイツ!! ハツ!!』

響は女の子の前で右手を脇腹に持つていき左手を前に出した構えをとつた。

「あいつ戦えたのかよ!!」

奏はそう言つてノイズにアッパーをくらわせた。すると、奏の耳にエンジン音が聞こえる。

「つ?」

奏同様に響の耳にも届いていたらしく2人揃つて音の方向に視線を向けると、そこには緑色のバイクに乗つた人物が向かってきていた。

そのバイクに乗った人物は響へと向かい、そのままその脇を走り抜け、響の背後にいた巨大な緑色のノイズへと向かつて行く。

寸前にバイクに跨っていた人物は上空へと飛び上がり、バイクのみがノイズにぶつかり爆発を起こし上空を華麗に舞いながら

『I m y u t e u s a m e n o h a b a k i r i t r o n』

透き通った声で歌うように咳いた人物は響の目の前に降り立ち

「呆けない！死ぬわよ！」

「え・・・・？」

「あなたはここでその子を守つてなさい！」

そう言つて走り出す。

「翼さん!?」

響は驚愕すると翼は響と同じ鎧を纏うと翼は刀を巨大化させ青い斬撃『蒼ノ一閃』によつて翼の正面にいたノイズたちが炭へと変わり爆発する。さらにそのまま上へ飛びあがつた翼は右手に刀の形に戻つた剣を握つたまま両手を大きく広げる。と、翼の周りにいくつもの青い光が湧き出しそれがすべて同じ形の両刃の剣の形となり、雨のようにノイズたちに降り注いだ。

翼の技の一つである『千ノ落涙』はノイズたちをさらに大量の炭へと変えていく。そのままノイズへと突つ込んだ翼は刀を振るい、ノイズを斬つて行つた。

「すゞい・・・・・！やつぱり翼さんは・・・・！」

その光景に響は感嘆の声を漏らす。

そして奏の方は黒いメモリを右腰にセットした。

「分裂してる!? っていうか増えた!?」
響は奏の方を見るとそこには右半身が増えた奏がいた。

響は目玉が出るくらい驚いていた。すると奏の右半身が予測不能な攻撃で周囲にいた全てのノイズを一箇所に集めた。

「行くぜ『ジョーカーストレンジ』」

そして奏の左半身が腕を伸ばし光を纏うとそのままノイズ共にラリアットをした。ノイズ共は爆発し全て炭となつた。

数分後、現場には自衛隊の制服や黒いスーツに身を包んだ人たちが入り乱れ、事後処理を行つていた。少し離れたところで紙コップに入つた湯気の立つ飲み物を飲む少女の姿にホッと安心したように笑みを浮かべた。

「あの」

「へ？」

自分に呼びかける人物に響は視線を向けるとそこには自衛隊とも、他の黒スーツとも、警察とも違う紺の制服に身を包んだ短髪の女性がにこやかに紙コップを差し出していた。

「あつたかいもの、どうぞ」

「あつ・・・あつたかいもの、どうも」

湯気の上がるその紙コップを受け取ると響は息を吹きかけそして飲み始めた。

「フハア～！」

美味しかったのか響は頬を緩ませると突然響の体を光が包みこんだ。

「へえ？」

響は何が起こったのか分からずただ驚愕しており光が収まると身に纏つていた鎧が消え、響の姿が元の制服姿に戻つた。

「うわっ!? わわわっ!?」

突然のことに紙コップを落としバランスを崩した響はそのままよろけて倒れそうになる。だがそんな響を背後から歩み寄った人物が受け止める。

「わわっ！ ああ！ ありがとうございます！」

慌てて身を起こし自分を受け止めてくれた人物へお礼を言いながら頭を下げる。そして自分を助けた人物を見ようと顔を上げるとそこには翼が立っていた。響同様先ほどの鎧姿ではなくリディアンの制服になっている。

「ありがとうございます!!」

響はもう一度翼にお礼を言うが翼はそれを無視して1人の黒服の男性に話しかけた。

「緒川さん。ダブルはどこに逃げましたか？」

「申し訳ありません翼さん。ノイズを倒した後のドサクサに紛れて逃げられてしましました」

男は翼にそう言うと翼は悔しそうな顔をした。

「そうですか」

翼がそう言つた時だつた。

「あの！」

響が翼に話しかけた。

「実は…翼さんに助けられたのは、これで二回目なんですね!!」

響がそう言うが翼は無視した。

「ママ!!」

「？」

近くから先ほどの女の子の声が聞こえた。響はそちらの方に向くとそこには先ほどの少女が母親らしき女性と抱き合つてしているところだつた。

「よかつた！ 無事だつたのね！」

女性は娘が無事で安心したのか目に涙を浮かせながら強く抱きしめていた。すると、横からタブレットを持った女性が話しかけた。「それでは、この同意書に目を通した後、サインをしていただけますで

しょうか?」

女性は、タブレットを差し出しながら説明を始めた。

「本件は国家特別機密事項に該当するため、情報漏洩防止の観点から、あなたの言動および言論の発信には今後一部の制限が加えられることがあります。特に外国政府への通謀が……」

女性の言葉にポカーンと母親と少女が口を開けているさまに苦笑いを浮かべた響は

「じゃあ……私もそろそろ……」

と、翼に視線を向ける。しかし、そこには翼の他に黒スーツにサングラスをかけた男たちがずらりと並んでいた。

「あなたをこのまま返すわけにはいきません」

「な、なんですか!」

翼の言葉に響は素つ頓狂な声を上げる。が、翼はその疑問には答えず

「特異災害対策機動部2課まで同行していただきます」

事務的に冷たく告げる。直後に響の隣に歩み寄った男性が響の腕に大きな手錠をかける。ガコーンと言う音と共に手錠がロックされる。

「へ? あ、あの」

「すみませんね。あなたの身柄を拘束させていただきます」

そう言つて男性は申し訳なさそうに微笑みかける。

「だから! なんでええええええ!」

疑問の声を上げる響だが、誰一人それに答える者はいないまま車に押し込められどこかへと連れて行かってしまった。

野原探偵事務所。そこに奏はヘルメットを持って入ってきた。

「お帰りなさい奏」

事務所に入るとそこには奏の相棒の『マリア』がテーブルの上に夕食を置いていた。

「おう。ただいまマリア」

奏はそう言つて帽子を壁にかけると今日の夕飯のメニューを見た。

「今日は肉じゃがにしてみたのよ」

マリアはそう言つて奏の茶碗にご飯をよそい奏はそれを受け取る。

「今日は美味そうだな！」

奏はそう言つて「いただきます」と言つて肉じゃがを食べた。

「うめえ！ 今日もうめえぞマリア！」

奏は喜んで食べていると。

「それはよかつたわ。検索していたら偶然肉じゃがのレシピを見つけて食べたくなったのよ」

マリアはそう言つてジヤガイモを口に入れだ。

「それにしてもマリア。お前なんだよその格好」

マリアは箸でマリアの格好を指した。

「ちょっと箸で指さないでよ。行儀が悪いわよ」

マリアは奏にそう言つた。

「いや、なんだよそのマニアックな格好。そちら辺の男が見たら誘つてんのかつて言われるぜ？」

そう。マリアの格好は、白いワイシャツの下にパンツしか履いていなかつた。胸もおそらくノーブラ。それを見た奏は、肉じゃがを頬張りながらそう言つた。

「そんなつもりはないわよ。検索したらこの格好は最近かなり流行っているパジャマなのよ」

マリアは胸を張つてそう言うと。

「多分それ一部の人間しか流行つてねえぞ？」

と、奏がツッコんだ。

「・・・・。それにしても『立花響』。なかなか面白い娘ね、ゾ

クゾクするわ」

マリアがそう言つて笑うとそれを見た奏はため息をついた。

J 宝石泥棒／Q 認められない喧嘩

あたしは天羽 奏、ハードボイルドな探偵さ。探偵という生き物は基本的に朝に弱い。それはなんでかだつて？探偵は常に不眠症だからさ。探偵の脳は常に休息よりも謎を欲しがつてしまう。そのおかげであたしは常に不眠症なのさ。眠れない夜を過ごしたあたしはキツチンで軽めの食事を始める。ブラックコーヒーとトマトそして新聞。これが探偵の朝食セット。脳に栄養を送ることでどんな難事件もハードボイルドの解決するためにはトマトが1番。そして新聞を読むことで常に事件の情報は把握している。そして最後にブラックコーヒーで探偵の朝食は終わる。

「何やつてんのよ奏!!」

スパン!!

「まつたくウチがお金ないのは分かつてるわよね？あなたコーヒーなんて飲めないので変な無駄遣いしないでよ」

奏の相棒のマリアはそう言つて両手を腰に当てて叱つていた。右手には「無駄遣いするな!!」と書かれたスリッパがありそれでどうやら奏の頭を叩いたようだ。奏は頭を押さえながら

「う、うるせえよ!!ただでさえ探偵らしい仕事がない上にこの探偵朝食セットをなくしてしまつたらあたしがやつてるのはもう探偵じや

なくてただの何でも屋だろ!!」

「漫画やアニメに影響されすぎよ!!いい?これが普通の探偵なの!そういう事件の解決依頼なんて来ないに決まってるでしょ!そういうのは警察の仕事よ!」

マリアはそう言つて奏に写真を渡した。

「なんだよこれ?」

「新しい依頼よ。今度は迷子になつたチワワの捜索よ」

「またペット探しかよ!!お前本当にいい加減にしろよ!?少しほはマシな依頼持つてこいよ!!」

「派手な依頼より目の前のお金よ!!いいからとつとと仕事してきなさい!!」

マリアはそう言つて奏に帽子を渡してマリアは自分の部屋に戻る

と。

「チツ。あの淫乱ババアが」

奏がそう言つた瞬間だった。

カツ!!

かなの眼の前に包丁が通り過ぎ壁に刺さつたのだ。奏はそつちを見るとハイライトを失つた目で奏を睨みつけるマリアがいた。

「何か言つた?」

「ヴエ、マリモ!!」

奏はあまりの恐怖にオンドウル語を出してしまつた。

奏はいつものように依頼のペツトを探していた。そして今日は運がいいのか偶然にも迷子になつてゐるチワワをすぐに発見した。奏はすぐにチワワを捕まえてチワワを飼い主に渡すと報酬を受け取りそのままバイクに乗つて事務所に帰ろうとした。

「それにしても久々だな。仕事が午前中で終わるなんて」

奏はそう言つてバイクを走らせていると。

「!! 危なッ!!」

奏の前を突然何かが通つた。奏はそれを確認するとそこにはゴキブリが二足歩行をしたような化け物がいた。

「コツクローチ!!」

奏がそう言ふとそのコツクローチの右手を見た。その右手には大量の宝石が入つたバツクがあつた。

「宝石強盗か!!」

奏はそう言つてダブルドライバーを装着した。

「マリア!! ドーパントだ!!」

『あらコツクローチドーパントじゃない。さすがゴキブリの記憶を持つたメモリ。一番量産しやすいよね』

「解説してある場合か!! 逃げられるだろ!!』

奏はそう言つてバイクを反転させると同時にコツクローチは素早く逃げ始めた。奏はバイクを走らせながらジョーカーメモリーを取り出した。

『JOKER』

「マリア!! ルナ頼む!!」

『オーケーよ奏!』

『LUNA』

『変身!!』

『LUNA』／『JOKER』

奏の右半分は黄色になり髪も金髪になると左半分は黒色と黒髪に変化した。そしていつものWの髪飾りがつくとそのままコツクローチに向けて見方を伸ばした。

『びぎっ!!』

コツクローチドーパントは足を掴まれたせいで派手に転ぶとすぐに立ち上がる。ダブルはそのままバイクでコツクローチドーパントをひいた。

『ぎぎゃっ!!』

コツクローチドーパントは地面を転がるとダブルはバイクから降りてコツクローチドーパントに向かって走りながらメモリチエンジをした。

『CYCLONE』／『JOKER』

ダブルは右半分が緑に変わるとそのままコツクローチドーパントに掴みかかりまずは背負い投げをした。

「ドラッ!!」

ダブルはコツクローチドーパントを地面に投げて叩きつけると無理矢理たたせて腹を殴り顔面を殴りまた原を殴るという上下のコンビネーションをくらわせた。コツクローチドーパントはダメージに耐えられなかつたのか持つっていた宝石はそこら中に散らばつた。しかしダブルは気にせずコツクローチドーパントにロークリックをしたり背中をつかんで膝蹴りをした。

「弱いなこいつ」

ダブルはそう言つてコツクローチドーパントの顔面を殴ると地面に倒れた。

『たぶん今日使つたばかりなんだと思うわ。力の使い方が分かつてないなら今がチャンスよ』

ダブルはそういうとジョーカーメモリーを取り出して右腰にセツトした。

『JOKER MAXIMUM DRIVE』

『ジョーカーエクストリーム!!』

ダブルは2つに分かれ奏の姿とマリアの姿に分かれるとそのまま連続でライダークリックをくらわせた。

『ぎやああああ!!!』

コツクローチドーパントから強制的に変身解除をされメモリブレ

イクされると変身者は大学生ぐらいの男だった。ダブルは変身を解除して気を失っている男を拘束すると。5台のパートカーが来た。

「やつと警察が来たか」

奏はそう言つてパートカーから降りる刑事をみた。

「あ、刃野旦那」

「おつ、奏ちゃんじやん。もしかして捕まえてくれたのか？」

パートカーから降りてきたのはツボ押し期を持った30代後半くらいの男だつた。彼の名は刃野 幹夫。奏の師であり義父でもある野原 信之介が生きていた時に何回か顔を合わせている刑事で人柄がかなり良く奏の遊び相手にもなつてくれたため奏にとつて2番目に信頼できる男だつた。

警察はコツクローチドーパントの変身者と破壊されたガイアメモリーを証拠品とした回収すると部下達は先に引き上げて行つた。

「それにしてもお前も野原さんもガイアメモリー事件にめちゃくちゃ巻き込まれるな」

「まあ、一応因縁はあるからな」

奏はそう言つて頭をかきながら答えた。すると刃野刑事が奏と肩を組む。

「それより奏ちゃん。面白い情報を教えてやろうか？」

と言つた。

「面白い情報？」

「ああ。そいつはもしかしたらガイアメモリーの販売なんかも知らないんだよ」

「マジか刃野旦那？」

奏はそう言つて刃野刑事を見た。

「まだ確証はないから分からねえがもしかしたらだ詳しく述べてある」

刃野刑事はそう言つて封筒を渡した。

「じゃあいつものように頼むぜ」

刃野刑事はそう言うとパートカーに乗りそのまま帰つて行つた。

「まったくあの人は」

奏は少し呆れているとそのままバイクに乗りその場を後にした。

「ハア。すっかり帰りが遅くなつたな」

奏はそう言つて帰路を走つていた。奏は休憩がてら公園のベンチで横になつていたがいつの間にか寝てしまい夜になつっていた。奏は急いで帰つている時警報音が鳴り響いた。

「ノイズか」

奏はそう言つてケータイを取るとノイズの発生している場所を調べすぐにその現場に向かつた。奏はバイクを走らせながらドライバーをつけると。

『ちよつと奏！あなたどこで何していたのよ!!』

『悪い寝ちまつてたよ。それよりノイズが現れた！』

『!!オーケー分かったわ』

奏はジョーカーモリーを取り出した。

『JOKER』

『CYCLONE』

『変身』

奏は再びダブルに変身すると現場に着いた。現場では風鳴 翼と

何故か立花 韶がいた。

「あれは響!?なんであいつがあんなところに!?」

ダブルはそう驚いていると。

『ノイズは片付かれているけどなんだかおかしな雰囲気ね』

マリアはそう言つて周りを分析していたすると。

「!!マリア!!」

『!!ええ、分かつていてるわ!!』

ダブルはすぐにバイクを走らせた。理由は翼が響に刀を向けていたからだ。

「やめろ!!」

「ふえつ?」

「むつ!?

翼はバックステップで後ろに下がり奏は響の前に割り込むとバイクから降りた。

「ダブル!!」

「あ、奏さん!!」

響は思わずダブルの名前を言つてしまつた。

「おい！響!!」

「・・・・・・・・あつ」

響は慌てて口を塞いだ。だが翼は聞こえてなかつたのかダブルを見みつけていた。

「何しに現れたダブル！」

「それはこっちのセリフだなんで響に刀を向けてんだ！」

「私はその子を認められないからだ。中途半端な覚悟で戦場に出てきても邪魔になるだけだ」

「だつたら口で言えよ!!なんで刀を向ける必要があるんだよ!!」

「簡単だ。私は立花もそしてダブルお前も殺してやりたいくらいに憎んでいるからだ」

「えつ？」

突然のことに奏も響も目を丸くした。

「どう言うことだよ？あたしならまだ分かる。だけどなんで響まで

!?

「立花が纏っているのはギャングニールと呼ばれる聖遺物。そしてその聖遺物は私の大切な人。燕姉さんの物だ。事故とはいえ私から見たら彼女は燕姉さんから奪ったようなもの。そして燕姉さんを守れなかつたお前も許せない！」

翼はそう言うとダブルと響に刃を向けた。